

---

# 魔法少女リリカルなのは～夜天の光の影～

デスサイズ・0

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜夜天の光の影〜

### 【Nコード】

N8266W

### 【作者名】

デスサイズ・0

### 【あらすじ】

「光の裏には影がある」

全てを失った少年は、飛ばされた世界…地球で一人の少女と出会う

その出会いは…少年と少女を変えた…

魔法少女リリカルなのは〜夜天の光の影〜

派手に始まります

プロローグ「…らしいな。」(前書き)

どうも、デスサイズ・0です

やっちゃまったぜ…だが後悔はしてねえ!!

後、A・sとか言ってますけど無印の少し前から始まります

「プロローグ」…らしいな。」

どこかの無人世界

少年「ハア…ハア…ハア…父さん！母さん！何処に…ハッ！」

少年は傷だらけで歩いてきた

その周りは炎で囲まれている

そして視線の先には

一組の男女が腹部に剣が刺さった状態で倒れていた

それは少年の両親だった

少年「あ…あ…」

父「あ痛たたたた…」

少年「ええっ!？」

母「全く…お腹に剣突き刺して、拳げ句の果てにこの世界を壊して  
いくなんて…なかなかえげつないことするわね…」

少年「ええええええええええええええええ!!!!!!」

腹に剣か刺さつたまま立ち上がる両親

父「お、良かった…生きてたか…」

母「さすが私達の息子ねえ…あ痛たたた…」

少年「いやいやいやいや!!は…腹に…剣刺さってるよ!!!」

父「ああ、大丈夫だこの程度平気平気…痛いけど…」

母「とは言え…もう直ぐこの世界は崩壊するわ…私達の魔力もちよ



その世界は崩壊した

地球

海鳴市

零夜「だあああああああ！……！！！」

ドゴドゴオオオオオン！……！！

零夜「グフツ……」

零夜は気を失った……

魔法少女リリカルなのはA・S・S  
夜天の光の影

派手に始まるぜ……！！

プロローグ」…らしいな。」(後書き)

俺ははやて好きです

つまりヒロインははやて

派手に行くぜ！

第1話 少女と少年の出会い「…だってさ」(前書き)

第1話

はやての口調が有ってるかかなり心配

間違っていたり、これは違うだろうって所はバンバン言ってください

第1話 少女と少年の出会い「…だつてさ」

俺に……もっと力が……

力があれば……

父さんも……母さんも……

あの世界も……

守れたかもしれないのに……！！！！

力を……

もっと……

もっと俺に……力を……

俺に力をくれ……！！

悪魔に魂を売ったっていい……!!

俺に……!もつと……!力を……!!!

零夜「う……」

??「あ、起きた?」

零夜「うつつ……」

いまだぼんやりする意識の中、視界はまだはっきりしないが、俺は眼を開ける。

そして目の前に……

零夜「…天……使……？」

??「？ウチは天使とちゃうよ、普通の女の子や。」

しかし、今の俺には…最初…天使にしか見えなかった。

零夜「ああ…すまない…うっ！」

起きあがろうとした俺の全身に激痛が走った、だがなんとか起きあがった

??「あかんよ、一応手当てしといたけど、傷だらけで突然現れて倒れてたんやから。」

零夜「…倒れてた？」

??「ウチの部屋のと真ん中にな、本よんでたら、突然光ったかと思つて振り返つたら、倒れてたんよ。ほんまびっくりしたわ…」

零夜「そうか…ありがとう…え」と

??「ウチの名前は八神はやて。ひらがなではやて…変な…名前やろ…？」

零夜「いや、綺麗ないい名前だと思つぞ、俺は。俺の名前は零夜、かげみやれいや影宮零夜だ。」

はやて「ほんま？ありがとう…零夜君…」

零夜「あのさ…此処って…地球だよな？」

はやて「？そりゃあそうやる。」

零夜「そう…か…なら…父さんも…母さんも…」

俺ははやてに聞かれない程の声で呟いた

はやて「なんで…泣いてるん？」

零夜「え？」

俺は手を眼に当てた

確かに俺は泣いていた

はやて「なんか…あつたんか？」

零夜「ああ…少し…ね…」

はやて「…泣きたかったら、泣いたらええよ。」

その言葉を、聞いた瞬間

零夜「う…ぐ…う…う…う…」

俺は

泣き出していた。

はやては俺の背中をさすったり、頭を撫でていてくれたらしいが、今の俺にはあまり感じ取れなかった…

俺はどのくらいの時間泣いていたのだろうか？

俺の感覚では10分程なのだが…

はやて「落ち着いた？」

零夜「あ…ああ…」

はやて「そっや、零夜君、お腹空いてないか？もうそろそろ、晩御飯を作るうかと思ったんやけど…」

零夜「…いや…さすがにそこまで世話になるわk『グギユルルル…』  
…あ…」

はやて「どっやら、お腹は減ってるみたいやな、ちょっと待っててな、今から作るから。」

零夜「あ…あの…俺も手伝っよ、俺…料理得意だからさ…」

はやて「いや、怪我してるんやし、無理はせんほっがええよ。料理は、私も得意やし。」

零夜「でも、少しぐらいは手伝わせてくれないか？じゃなきゃ俺の気が済まないんだ…」

当然だ、突然現れて、手当てをしてもらって、「ご飯を食べさせてもらうなら手伝わなければ俺の心が持たない。

はやて「うーん…無理はしたらあかんよ…」

零夜「大丈夫、体はだいぶマシになってきてるから。」

はやて「じゃ、行こか。」

そう言うてはやては車椅子を動かした

俺も立ち上がってついて行く

零夜「車椅子…足…悪いのか…？」

はやて「うん…よく分からんけど、動かないんよ…」

零夜「…そうか…」

はやて「じゃあ何作ろかな、零夜君はなんか、嫌いな食べ物とかある？」

零夜「…いや、特に無いな。」

はやて「じゃあ…カレーでいいかな？」

零夜「ああ、頼むよ。」

そして、俺はカレーが出来るのを待っていた。

少しして、カレーが出来たので、二人で食べ始めた。

はやて「そう言えば、此処は地球か？て聞いてきたけど、何でまたそないな変な質問を？」

零夜「あゝ…それはだな…」

俺は自分のことをはやて話すことした

続く…

第1話 少女と少年の出会い「…だってさ」(後書き)

零夜がはやてに、そしてはやてが自分達の事を語りあってる間に、  
次回は主人公設定とかを書きます

## 主人公設定とか

名前

影宮零夜

(かげみやれいや)

年齢 9歳

髪色 黒

眼の色 スカイブルー

魔力色 漆黒

魔力変換資質 雷、???

所持デバイス

極夜 日本刀

ソウルイーター 両刃剣

Shadow&Light (シャドウ&ライト)

二挺銃

極夜は最初から自分のデバイスだがソウルイーターは父親の、シャドウ&ライトは母親の使っていたデバイス

遙か昔から続く<sup>ソルジャー</sup>戦士の継承者

ある日、住んでいた世界が何者かの手により消滅

その際、昔住んでいた地球の海鳴市に両親によって転送され、はやての家に落下。

そのままはやての家に居候

両親は恐らく死亡

しかしチート過ぎるので生きているかもしれない

<sup>ソルジャー</sup>戦士の継承者として両親に鍛えられ、何でも出来てしまうようになった。

また、あらゆる戦闘技術から学問を学ばされた。  
本人も、積極的に取り組んでいた。

ソルジャー  
戦士とは

金で戦う傭兵とは違い、自分で戦う戦場を選び、人々のために戦う傭兵のこと

ソルジャー  
戦士は戦いではなく、便利屋のような仕事を普段はしていたり、管理局員だったり、普通に働いていたり、これまでの継承者によって様々である

第2話 「こつこつ展開はお約束」…なのか…?」 (前書き)

今回は短いです

## 第2話 「こいつ展開はお約束」…なのか…?」

はやて「へえ…違う世界から…」

零夜「そう、そしてこの刀の形のペンダントが俺の相棒の極夜。」

極夜「…よろしくお願いします。」

はやて「おわっ…喋った…! 凄いなあ…」

零夜「で、このブレスレットが父さんの相棒ソウルイーター。」

ソウル「よろしく…!」

零夜「で、この白黒のカードがシャドウ&ライト」

S&L「よろしくね。」

はやて「…じゃあさっき泣いてたのは…」

零夜「…父さんも母さんも…死んじゃったからね…あ…でも生きてる気がしてきた…あの二人なら…」

はやて「?」

零夜「なんせ、馬鹿でかいドラゴンに食われたのに普通に生きてた

し、ここに来る前も、腹に剣刺さってるのに普通に喋ってたし、地震を止めるために地層を叩き斬ったり…砲撃で台風を消し去ったり、次元を斬り裂いたり、空間に穴開けたり…ムチャクチャだったからなあ…なんか普通に生きてる気がする…」

はやて「それチートすぎるやろ!!」

零夜「ほんとチートすぎだったなあ…なんか今まで自分がよく耐えたと思うよ…でも…ハア…」

はやて「…まあ…よく分からなかったけど…一つ確実に分かった事があるわ。」

零夜「…」

はやて「どこも行くところ無いってことやな。」

零夜「うっ…」

はやて「なら、ここにいたらええよ。1人より、二人の方が寂しくはないから…」

そこで俺は気付いた

この家には他に誰もいないと

零夜「はやては…1人で…?」

はやて「うん…随分まえから…」

俺はすぐに分かった

はやてはずっと寂しかったんだと  
だから、俺の答えは…

零夜「…これから、お世話になります………」

はやて「ホンマか!?!」

零夜「ああ、よろしく頼むよ。」

続く…

第2話 「こっつう展開はお約束」…なのか…？」(後書き)

作者：H A H A H A H A H A

零夜「作者が壊れたな。」

はやて「ストーリー構成が完璧に出来てないのに投稿したらしいからね。」

零夜「しかもA'sを今見直してるらしいぞ」

はやて「はよなんとかせんとあかんな。」

作者：だが後悔はしてないぜ!!

零夜「ダメだこいつ、速く何とかしないと…」

作者：ふはははははははははははははははは!!

はやて「発狂してるなあ…」

多分続く…

第3話 父の本があるらしい」「…マジかよ…」「(前書き)

まーたムチャクチャな駄文になっちまった…

だが後悔はしてません

派手に行くぜ

### 第3話 父の本があるらしい」…マジかよ…」

零夜が八神家に来て数週間

はやて「そう言えば零夜君、普段着は今着てる服以外無いよね？」

零夜「まあ、そうだな。」

そう、俺は普段着を洗濯してるときはバリアジャケットで過ごしているのだ

ただ、真っ黒なロングコートだから町を歩くと視線が凄まじい。

カッコいいと思うんだけどな…俺は…

まあ季節はずれなのは分かってるよ

今は5月の末だからね。

はやて「だから、今日買いに行かへん？」

零夜「いや…家に居候させてもらって、飯も食べさせてもらってる

のに、さすがにそこまでは世話にはなれないからいいよ……」  
はやて「遠慮せんでええよ、お金はお父さんの知り合いの人に、  
っぱいもらってるから。」

零夜「そう言う問題ではなくてだな……」

はやて「じゃあ自分に似合う服があるか心配とか？」

零夜「そうでもなくてだな……」

はやて「じゃあ何が問題なん？」

零夜「俺の精神的な問題だ……何から何まで世話になるのは……ちよっ  
とな……」

はやて「だからそんな事気にする必要無いって……！なんなら、出世  
払いにしといたるか？」

零夜「本気でそうさせてもらおうかな……」

はやて「んじゃ決まりやな！準備して行くで……！」

零夜「お……おっ……」

零夜「で…どこに買いに行くんだ？」

はやて「あのデパートや!!」

零夜「うおお…でけえ建物だな…」

はやて「さ、行こか。」

零夜「おお…」

零夜「…。」

一番安い服はどれだ…

似合わなくて良いから一番安い服を買おう…それとそれに安いのを…

零夜「これ安いな…」

何？別世界に住んでいた俺が何でこんなに地球に詳しいかって？前にも言ったが、俺の両親は地球の日本の此処、海鳴市の出身で、

俺自身5歳までは此処にいたからな。

まあ随分変わってたし、あの頃のこととははっきり覚えてないから情報に全く役に立たんがな

はやて「零夜君、ここにいたことあったんや。」

零夜「何故にそれを…」

はやて「考えてる事口に出してたよ。それと誰にしゃべりかけてたん？」

零夜「…ちよつと虚無の存在にな…」

はやて「なんやそれ…」

零夜「そ、そんな事より服はコレにするよ。」

はやて「…うわ…ダサ…さすがにこれはいくら何でも無いわ…」

零夜「まあ…値段安いのを取ってきたからね…」

はやて「あかん！ウチが選んだる…！」

零夜「え、いや…」

はやて「お！これええんちゃう！？ちよつと着てみて…！」

零夜「あ、いや…その…」

値段たけえ…

はやて「あかんかな…？」

零夜「……………分かった…着てみる……………」

…………無理、断れないよ

上目使いで頼まれたんだぜ…

絶対に断れない…

けど、正直凄くかわいかった

一瞬見とれてしまったな

で…まあ…なんやかんやで俺の服は買い終わった。

出来るだけ値段は抑えたけど…けっこう高かった…

で、今は昼ご飯を食べ終わって二人でうろつろしている

はやて「ほんなら、また図書館に行こか。」

零夜「分かった、道はこつちだっけか？」

はやて「うん、あってるよ。」

はやては本当に本を読むのが好きだな。

俺もけっこう読むけどね。

けど…図書館…中広いからまだ、ちょっと迷いそうだ…

そんな不安をわずかに抱きながら俺は図書館へはやての車椅子を押しながら向かう

はやて「また本借りてくるから、零夜君もなんか見てきたら？」

零夜「いや、はやてが借りたい本が手の届かない所にあつた時の為について行くよ、俺は別にいいからさ。」

つーか面白そうな本が無いんだよ…  
見つけた面白そうな本は全部読んだからな…  
だから必然的にはやてに書いていくことになるんだが…  
もしかしたらいいのが見つかるかもしれん  
ちよつと期待してみるか。

はやて「え」と…あつたあつた…」

零夜「…ん…？なんだ…？」

俺の視線の先には、漆黒の分厚い本が目にとまった

何故か俺は、その本に吸い寄せられるように、近づき…

手に取った

そのままページをめくる

しかし、ページには何語か分からない言葉が書かれていた  
数ページ、絵が描いてあるものもあった

零夜「これは…まさか…」

間違いない

これは父さんが昔持っていた…魔導書に違いない…

なぜこんな所に……あ…確かなくしたとか言ってたな…

まあいいや、パクっていいこう。

いや、元々父さんの物だから返してもらおうと言っ方が良いかな。

「れ……く……零……君……夜君………零夜君!!」

零夜「……ハッ!」

はやて「零夜君、どないしたん? さっきからずっとその本持って突っ立ってるけど……」

零夜「これ……父さんの物なんだ……証拠に……ほら、影宮剣夜って、父さんの名前が書いてある……」

はやて「何でこんなとこに……」

零夜「父さん……確かどっかで落としたりとか言ってたけど……」

はやて「訳わからん……」

零夜「俺も訳分らない……」

まあ今そんな事話したって意味はないのでとりあえずこっそり持つ

て帰った  
ってか読め無いけど…

続く…

第3話 父の本があるらしい」「…マジかよ…」(後書き)

さて…続きを…

そろそろ出すか…

第4話 新しい家族が増えるらしいぜ」「…マジかよ。」「(前書き)

ヴォルケンリッター登場の回

そして零夜とはやてのデート？

第4話 新しい家族が増えるらしいぜ」「マジかよ。」

6月3日

夜

とりあえず今はちょっと眠い  
…まだ夜8時か…

しかし気になることがあり、俺は眠れずにいた

零夜「なあ…極夜…」

極夜『どうしました…?』

零夜「あの本…はやての部屋にあった鎖で封印された本…あれって  
何だろうな…何か知ってるか?」

極夜『いえ…すみませんが…私にはわかりません…』

零夜「ソウルと、シャドウライトは?何か知らないか?」

ソウル『ん〜…何か昔…見たことがあるような…無いような…』

S & L『私も…見たことあるような…無いような…感じね…』

今更だが、実はこのソウルイーターとシャドウ&ライト、遙か昔から存在するデバイスらしい  
それこそ何千年前とかの領域らしい…

しかしメモリが容量が少ないらしく、記憶は重要な事以外、全て消えていくらしい

だから昔の持ち主の事はほとんど覚えてないとか。

それと、実は物凄い危険だとか…

でも詳しくは全く分からない

極夜はこの二つを参考に、現代の技術で父さんと母さんが作ってくれた

おっと…長くなりすぎたな…

極夜『零夜…誰に話しているのですか？』

やべえ、また口に出してたか。

零夜「…読者の方虚無の存在にだ…」

極夜『…またですか…』

零夜「…それにこの父さんの本…何語だ…？全く読めない…」  
S・L「これは…古代ベルカ文字ね…さすがにこれは…ちよつと読  
むのは難しいわ…」

ソウル「つーかよオ、何でその本…影の書が図書館にあつたんだ？」

零夜「この本は影の書って言うのか。」

極夜「お二人とも無理やり話題を変えられたことには突っ込まない  
んですね…」

零夜「あー…ちよつと眠いな…極夜、今何時？」

極夜「午後九時です。」

零夜「…若干早いがもう寝るか…」

実は俺は今日と明日、はやてと一緒に寝ることになっている

理由は明日がはやての誕生日だからなんだが、俺はプレゼントをあ  
げることが出来んからな、はやてのお願いを何でも聞く  
と言うことにしたんだが…

そしたらはやてに

「じゃあ今日と明日、ウチと一緒に寝て！…」

と言われた

おっと、読者の方虚無の存在に話している間にはやての部屋に付いたな

コンコン

零夜「はやて、入って良いか？」

俺はノックして、呼びかける

はやて「うん、ええよ〜」

ガチャ

零夜「はやて、俺…もう眠いから寝ようと思ったんだが…はやては  
まだ起きてるか？」

はやて「うん、でもこの本読み終わったら寝るから、もうすぐ寝る  
よ。」

零夜「んじゃ、俺もう此処に居て良いか？」

はやて「…うん。」

零夜「……」

はやて「……………」

はやてはまだ本を読んでいたようだ

はやて「あっ……もう12時……」

もうそんな時間か、はやてを待ってたらいつの間にかそんなに時間がたってたとは……

午前0時

その瞬間

本棚の、鎖が巻かれた本が紫色に輝き出した

はやて「?……」

はやては向こう側を向いていたが光に気が付いてこちらを向いた  
そして家が揺れた

俺は飛び起き、はやてを守るように移動する

零夜「…はやて…俺の後ろに……極夜、セットアップ。」

極夜『了解……。』

俺は極夜をセットアップし、漆黒のロングコートを着て、少し薄めの黒い鞄の日本刀を、いつでも抜刀できるように構える  
抜刀術の構えだ

本は空中に浮かび上がる

紫色の光がわずかに強まり、本が鎖を破壊せんとしている

はやて「零夜君……」

はやては不安なのだろう。

俺の背中にしがみついている

そして、鎖が弾け、ページが凄まじい勢いでめくられていく。

中身は全て白紙だ

『封印を解除します』

本が喋りやがった…

『起動』

床に円のような物が引かれた

そして円の上に突然4人の男女が現れた。

服は、全員黒いインナーのような物を着ている

「闇の書の起動を確認しました。」

「我ら、闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士。」

「夜天の主に集いし雲。」

「ヴォルケンリッター。何なりと命令を。」

え〜〜〜……

これどういう状況だよ……

どないせえっちゅうねん……

……今なんかはやてみたいな喋り方になったな……

とりあえず……

零夜「あの……どちら様で？」

続くぜ……

第4話 新しい家族が増えるらしいぜ」「マジかよ。」「(後書き)

ヴォルケンリッターのセリフあってるかな…心配だ…

**第5話 とりあえず自己紹介と状況整理「…まずはそれからだ…」 (前書き)**

さて、今回は守護騎士の登場2

派手に行くぜ

**第5話 とりあえず自己紹介と状況整理「…まずはそれからだ…」**

零夜「えーと…とりあえず全員椅子に座っていただいで…」

はやて「とりあえず…名前とかから…」

何があつてこうなつたかつて？

それはな…

零夜「…主…もしかしてはやての事か？」



その後、はやてを病院へ連れて行ったのだが…

この人達が付いてきて、石田先生に色々言われたが、海外に住んでる遠い親戚で、はやての誕生日に驚かせようとしてきたと説明したら納得してくれた

…あんだ少しは疑えや…

ちなみに俺も親戚ってことになってるんだが、なんか俺達二人が一緒に居るのを見ているときだけ、視線が違う…気がする…  
なんかニヤニヤしてたし…

で、最初の場面に戻るわけだ。  
分かったか？

はやて「また始まった…零夜君の虚無の存在への語りかけ…」

おっと…口にててしまったか…

口に出してしまうのはなんとかしなきゃな…

で、そのあとシャルマルさんて言う金髪の女性が自分たちの存在や、  
闇の書とかについて、はやてに説明していた

俺か？俺はとりあえずお茶を入れていた

零夜「で、はやてはどうするんだ？」

はやて「せやねー…闇の書の主として……」

おそらく蒐集を命じられる思ったのか、全員の表情が真剣になる

はやて「守護騎士みんなの衣食住を私がしっかり管理せなあかな。

」

「「「「は？」「」「」

拍子のぬけたこえが4人からでた

ちよつと面白かつたかも

はやて「みんなの服とか、買ってくるから、サイズとか、はからせてな。」

はやて、どつからメジャー出した

はやて「ポケットから出したよ」

勝手に俺の心を読まないでくれ…

はやて「それは出来へんな」

零夜「……」

つてかいつの間に読心術なんざ身につけたんだ…

しかもしゃべりながらもサイズは計ってるし…

はやて「最近身につけたんよ」（ほんまは読心術なんか身につけてへんよ）零夜君、たまに顔によくでるしな」（「

零夜「俺…ちよつと部屋に戻るわ…」

ん？その後か？

服買ってきてみてみんなが着替えてた

だがザフィーラが犬：あいや、狼になってたから着替えなかったが…

まあ本人がこの姿の方が楽って言ってたからそれはそれで良いと思う

はやてとシャマルさんが残念そうにしてたが

まあザフィーラもたまに着るって言ってたから良いだろ。

こうして、守護騎士4人が新しく家族になりました

続く

第5話 とりあえず自己紹介と状況整理「…まずはそれからだ…」(後書き)

作者：H A H A H A H A H A H A H A

零夜「ダメだ、完全に壊れてやがる。」

はやて「どうする?」

零夜「斬つとくか。」

はやて「なんでいきなりそこへいくん!?!」

零夜「斬れば直ると聞いたから。」

はやて「だれに!?!」

零夜「蒼いコートの死神に…」

はやて「それ…作者の別作品の人や!」

作者：お前じゃ俺を斬れねえよ Adios!

零夜「あ、にげた。」

??「Die!?!」

シャキイイイン!!

作者：ギヤアアアアア！

はやて「作者：斬られたんやな……」

零夜「蒼いコートの死神に斬られたんだろっね……」

この悪ふざけコーナーは続く……

…のか…？

第6話 料理で最も大切なのは調味料「いや違うだろ……」 (前書き)

さあ、そろそろ零夜と守護騎士達を絡ませていくか…

派手に行くぜ

第6話 料理で最も大切なのは調味料「いや違うだろ……」

守護騎士たちが来てから一週間ちよつとたった

最初はみんな、表情が硬かったが、今はやわらかくなってきている

まあ俺に対する警戒心はまだごくわずかにあるみたいだがな

仕方ないよなあ…… 最初にあつた時に刀構えてたからなあ……

まあ多分、なんとかなるよな。

なんか心配になってきた……

零夜「はやて、俺…まだみんなに「く」僅かに警戒されてるけどさあ…大丈夫だよなあ…」

はやて「そうか？みんな警戒してるような様子はないけど…」

零夜「普通では気付かないくらいだからな。」

はやて「大丈夫やって！」

零夜「そう…だよな…！ま、なんとかなるか！よし、今日は俺が昼御飯作るよ！」

はやて「なんでそんな突然に…」

零夜「なんとなくな！それに俺の料理をまだ食べてもらってなかったしね。」

はやて「そういえばそうやな、零夜君料理得意って言ってたし。」

零夜「でも、はやてには勝てないかな…」

はやて「期待して待つとくわ。」

はやて「んじゃ、いただきます。」

「「「「いただきます。」」」」

昼御飯はとりあえず、シンプルにオムライスを作った。  
ちよいと、隠し味を入れたがな

「「「あっ……」」」

シグナム「…これは…」

シャマル「おいしい…!」

ヴィータ「…前食べた時と味がちよつと違う…はやて、味付け変えた？」

はやて「これは私が作ったんとちゃうよ、零夜君が作ったんやで。」

零夜「…はやてには全く勝てないけどな…」

シグナム「いや、とてもおいしい。」

シャマル「とってもおいしいわ!」

ヴィータ「美味い!おかわり、ある!?」

零夜「ああ、あんまたくさんは無いけど少しはあるぞ、ほね。」

ヴィータ「ありがとう!」

思っきりがつついてんな...

シグナム「ヴィータ...食べ過ぎだぞ...」

零夜「そうだぞ、おやつにいいもん作ってやるから食べ過ぎるなよ。」

ヴィータ「はい。」

なに?おやつが何かって?

ストロベリーサンデーだよ!!

作者の趣味全開な気がするが美味いから問題ナシ!!

ザフィーラは甘いのが苦手らしいからコーヒーをいれてやろう。

ヴィータ「美味い!!」

はやて「びっくりやなあ…こんなも作れるなんて…」

零夜「味じゃあはやてには勝てないさ…」

はやて「でも、私はこんな作られへんわ…」

味

はやて > 零夜

レパートリー

零夜 > はやて

これが現実

続く…

第6話 料理で最も大切なのは調味料「いや違うだろ…」（後書き）

作者：あゝ…続きが浮かばねえ…

零夜「まさか行き当たりばったりで書いてるのか…!?!?」

作者：そりゃそうだ

零夜「駄目だコイツ…」

作者：H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A

まあお前ははやてといちゃつけるから良いだろ？

零夜「そんないちゃついた覚えは無いんだが…」

作者：こっから先がだな。H A H A H A

続くかも

第7話 見た目って結構大事だぜ?」「…そりゃあそつだな…」(前書き)

もう無茶苦茶だ…駄文を極めたよ俺…

第7話 見た目って結構大事だぜ?」…そりゃあそつだな…」

はやて「騎士甲冑?」

シグナム「ええ、我らは武器は持っていますが、甲冑は主に賜らなければなりません。」

シヤマル「自分の魔力で作りますから、形状をイメージしてくださいねば…」

俺達は、図書館にいた。

ザフィーラは狼形態なので、ヴィータと表で待ってるだろう。もしくは、遊んでいるだろう。

はやて「そつか…そやけど、私はみんなを戦わせたりせえへんし…」

零夜「だったら、服にすれば良いんじゃないか?俺のコートみたいな。」

はやて「そつやな!騎士らしい服!それでええか?」

シグナム「はい、構いません。」

はやて「ほんなら、資料探して、かつこええくの考えてあげなな！」

で、何故にはやて達はオモチャ屋にいくんだ？

ちなみに俺はザフィーラ連れて帰宅している。

晩御飯の準備しときたいからな。

ザフィーラ「零夜、聞きたいことがある。」

零夜「なんだ？」

ザフィーラ「何故刀のみで、その2つのデバイスを使わないんだ？」

零夜「前にも言ったけど…これは父さんと母さんのデバイスで…なんかかなりヤバい代物らしいんだ…だから無闇に使って何かあったら大変だからな…」

ソウル「オイ…零夜…言つとくが次元を斬り裂いたのは俺の力じゃなくて、剣夜之力だぞ…あとお前も次元斬のやり方は教えられてたじゃないか…」

S・L「空間貫通撃ちもね。」

零夜「……そうだけど……まだ一回もまともに出来てない…」

ザフィーラ「危険と言ってるが、そもそも何が危険なんだ？」

零夜「さあ…？詳しくは聞いたことがないから…」

ソウル「ハア…わかった。」

S・L「私達が存分に教えてあげるわ…」

ソウル「あんな、まず俺達はかなり古い……原初のデバイスの時代の代物だ。」

零夜「原初のデバイス！？そんな事初めて聞いたぞ！！」

S・L『そりゃあそうよ、今初めて言うもの。』

零夜「うおい!」

ソウル『原初のデバイスとっても、原初のデバイスの中でも俺は最新型だな。』

S・L『私はその一つ後くらい。』

ソウル『で、何が危険かって言うと原初のデバイス…第一世代の代物は魔力コントロールが非常に難しいと言うことだ。』

S・L『ちよつと魔力を込めただけで凄まじい破壊力が出たり、大量の魔力を込めたのに全く意味が無かったりするからコントロールが難しい。まあ私の場合は第二世代だから、かなりマシで、普通には撃てるけど…』

ソウル『俺はそうはいかない。まずは魔力を俺に完全リンクさせなければ、扱うことすら出来ん。』

零夜「じゃあ俺は起動すら出来ないのか…」

ソウル『出来る。まあ扱えるかどうかは知らんがな。』

ザファイラ「まだ起動してないなら一度起動してみた方が良いのではないか？」

零夜「そうだな…やってみるか…」

ソウル『まずは俺からだな。準備はいいか？』

零夜「ああ、ソウルイーター、セットアップ。」

俺は真紅のロングコートに黒いズボンに上半身の、コートの下は素肌と言う、父さんの使っていたバリアジャケットに姿を変える

手には長すぎず、短すぎずぐらいの両刃剣

Wのような形の鎧の中心に翡翠色の宝石のような物が付いている。

ザフィーラ「……素肌にコート……」

零夜「…父さん…何やってんだか…。」

作者の思惑全開な気もするが、父さんのせいにしておく。

ソウル「…魔力をリンクさせてみる。」

零夜「どうやるんだよ。」

ソウル「魔力を丁度良いくらいにコントロールしながら俺に魔力を込める。」

零夜「…難しいな…。」

その後、俺は30分程で完全にリンクさせることが出来た。

ソウル『まさかここまで早く出来るとは…』

え？何？そんなに難しいのか？

ソウル『魔力コントロールが上手すぎるな…これは面白い…だが続きはまた今度だッ！』

なんでコイツはこんなにテンションが高いんだ…

だがそろそろ晩御飯の準備をしなければ…

晩御飯は…何にするかな…

夕方過ぎ位にはやて達は帰ってきた。

どうやらデザインは大体決まったらしい

ちよつと楽しみだ。

はやて「さて！みんなの騎士甲冑、いよいよお披露目や！」

零夜「おお〜…」

パチパチパチ…

地味に拍手しておく俺

はやて「さあ！みんな！着替えるんや！」

「」「」「はい！」

零夜「おお〜…みんなよく似合ってるな…」

まあその後、俺も着替えさせられて一緒に並ばさせられたのは秘密。

続く…

第7話 見た目って結構大事だぜ?」…そりゃあそつだな…」(後書き)

作者：はあああああ…

零夜「作者、落ち込んでるなあ。」

はやて「ほんまやなあ…」

零夜「続きがなかなか思いつかない上に、小説に手が着けられてない事に悩んでるらしいよ。」

はやて「なんでや…」

作者：なかなか思いつかず、さらにはFF13を一日始めたからな…

零夜「ヲイ」

続くかもな

第8話 模擬戦と言つ名の真剣勝負「いやそれおかしいから!」(前書き)

サアアアテエエエ!!今回は戦闘だアアアア!!  
俺の本領発揮だア!!

第8話 模擬戦と言つ名の真剣勝負「いやそれおかしいから!」

始まりは、はやての一言だった

はやて「零夜君はどれくらい強いん?」

零夜「何故こうなったし。」

シグナム「さあ!戦<sup>や</sup>るぞ、レヴァンティン!」

レヴァンティン(以下面倒なのでレヴァ)『ja wo hī!』

零夜「何故こうなったし。」

極夜『諦めたほうがよろしいかと。』

とにかく何があったか聞いてくれ

何？そんな事はどうでもいいから話を進めろ？

だが断る

はやて「零夜君は確か自分で戦士<sup>ソルジャー</sup>って言ったよな？」

零夜「まあな。父さんと母さんもそう名乗ってたからな。」

はやて「で、シグナム達が騎士…どう違うんかよくわからんなあ…」

シグナム「あ…その…なんと言いますか…」

シヤマル「えっと…凄くわかりやすく言ったら、ベルカの優れた魔導師って事ですね。」

零夜「んで、戦士<sup>ソルジャー</sup>ってのは簡単に言えば、”戦う場所を自分で決めて人の為に戦う傭兵”だと言われている。」

シグナム「言われている？」

零夜「詳しくは知らん。なにせ、俺の先祖の時代から…地球で言ったら戦国時代ぐらい…向こうで言えば…古代ベルカ時代ぐらいの時代から名乗ってるらしい…と言うか、別に一子相伝とかじゃないから多分、先祖ってのはあってんのか間違ってるのかわからない…  
…ただ…」

はやて「…ただ…？」

零夜「戦士ソルジャーの名を受け継ぐには、先代から継承を許可された時…俺は許可されたけど…まだ自分に自信がない…」

はやて「自信ない言うけど…零夜君はどれくらい強いん？」

零夜「さあ…前まで居た世界の原生生物は全種類倒したけど…後は父さんと母さんには全く勝てなかったくらいかな…」

シグナム「……！！では主はやて！私が強さを見極めて見せましょー！！」

零夜「いや、しんどいんだが。」

ヴィータ「諦めた方がいいぞアニキ…シグナムは戦闘狂だからな…」

マジかよ…

ちなみにヴィータはなぜか俺のことをアニキと呼ぶ

何でだろうな

シグナム「シャマル！何処かの無人世界かどこかに転送を…！」

ウワァーオ

この人本気で戦るつもりだよ…

で、最初の場面に戻る訳

D o y o u u n d e r s t a n d ? (理解したか?)

零夜「ハア…極夜…頼む…」

極夜「了解。」

うーわ…シグナムの目がめっちゃ輝いてる…  
怖え…

今言つのもアレだが、シグナム達に  
「家族なのだから敬語は止めてくれ」  
と言われたので止めました。

ま、自分達からはやて対しては当たり前だけど敬語になるらしい。

……… ヴィータは普通に喋ってるけどな…

おっと…そろそろか…

零夜「…非殺傷設定ですよね…？」

シグナム「安心しろ、絶対に殺しはしない。刃は魔力で潰してある。」

零夜「…要するにそんな便利なもんついてねーよってことか…」

シグナム「さあ行くぞッ!」

ゴッ!

いきなり突っ込んできたアーーーーッ!!!しかもはええええええええええええ!!

ガキイン!!

零夜「ウオツ…!」

シグナム「…クッ…!」

横薙の一閃を受け止める

シグナムが押し切ろうとするが、俺は押し返す

零夜「タアッ!」

そのまま俺が押し切る。

シグナムは後ろに跳ぶ

だが俺は追撃する。

逆袈裟からの斬り下ろし . . . . .

. . . . . 避けられる

そのまま斬り上げる . . . . .

受け流される

だが斬り上げた勢いで飛び上がり、後ろ回り込み、反転しながら斬りつける

零夜「タアッ！」

ガキン！

零夜「んなっ！？鞘！？」

鞘で防がれるとは…

シグナム「やるな…！」

零夜「クツ…」

俺は後ろに飛ぶ

予想外の事態が起きたときには一度下がり、体制を立て直せ。

父さんに言われた事だ。

シグナム「レヴァンティン！！カートリッジロード！！」

レヴァ 『explosion』

ガコン！！

ゴウツ！！

うおお…剣めっちゃ燃えてるし…マジかよ…この人本気で潰しにかかってきてるよ…

魔力で刃潰した意味無いじゃん…

シグナム「紫電…一閃！」

零夜「極夜、やるぞ。」

極夜「分かっていますよ。」

零夜「行くぞ…雷龍爪！」

バチバチッ！！

極夜が激しく帯電する。

俺は帯電した刀で燃え盛る剣を迎え撃つ。

零夜「オラアアア！！！」

ガキーン！

ゴオッ！！

ぶつかり合った衝撃波だけでクレーターが出来る。

そして罅迫り合いへなだれ込む

シグナム「ウグッ…」

零夜「ハアアア…！」

ガキン！

再び離れる

シグナム「レヴァンティン…！」

レヴァ『schlange form!』

零夜「うおっ!？」

剣が伸びた!？

…いや…あれは…蛇腹剣…鞭状連結刃…か…厄介だな…

シグナム「ハアアアアッ…！」

零夜「チツ…」

大地を這う大蛇のごとく、連結刃が迫ってくる。

零夜「…そこかッ！」

シグナム「何ッ!?!」

俺に剣が当たる寸前に回避し、先端の少し下を極夜の鞘で叩き、鞘に巻き付けさせる。

零夜「ウオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

そのまま鞘に巻きついた状態のレヴァンティンを鞘で引っ張り、剣を落とさせる。

シグナム「しまっ…」

チャキツ

零夜「勝負有り…だな…。」

首に刀を突き付ける

シグナムは息を吐いた後

シグナム「ああ…」

小さな声で言った。

んでもって帰宅。

続くッ！

第8話 模擬戦と言つ名の真剣勝負「いやそれおかしいから!!」(後書き)

作者：やはり戦いは良いものだなアアアアアアアアアア!!  
ヒヤハハハハハハハハハハ!!

零夜「出た…作者の病気が…」

作者：すげえどうでも良いけど、この小説の話の先が全くみえねえ…

零夜「物凄い突然だな！オイ!!」

作者：ま、気分とノリだけで書いてるからだろうけどな

零夜「オイ!!」

作者：H A H A H A H A H A H A

続けようかな。

第9話 とりあえず謙遜はしすぎるな」…意味分からん…」(前書き)

相変わらずサブタイが意味不明



シヤマル「零夜君だって黒い雷を刀に纏わせてたじゃない。」  
零夜「いや、あれは仕方なく…」

ヴィータ「アニキ！今度はあたしに見せてくれ！」

零夜「あ…ああ…」

何か物凄い気迫なんだが…

ま、いつか。

続  
く

第9話 とりあえず謙遜はしすぎるな」…意味分からん」(後書き)

零夜「短すぎんだろ!!」

作者：What's you say? (何か言ったか?)

零夜「…斬る!!極夜!」

極夜「…ハア…了解…」

零夜「うおらあああ!雷龍爪!!」

作者：H A H A H A H A H A H A H A H A H A  
!きかねえよ!!その技、誰が考えたと思ってるんだア!?

零夜「何ッ!?!」

作者：わざわざ俺が体現して作った技だぜエ?

ハッハ―!!吹っ飛びなア!!

Real impact!!

零夜「ギヤアアアアアアアアアア!!」

きつと続くわー！

第10話 なんてことはないただの一日」…まあそれもいいか…」（前書き）

さあ、今回はなんてことのない一日

だがしかし…

今回も派手に行くぜ

第10話 なんてことはないただの一日」…まあそれもいいか…」

もうじき6月も終わり。

後僅かで7月だ

零夜「暑い…」

はやて「ほんまやなあ…」

ヴィータ「アイス…食べたい…」

零夜「お前さつき3本も食べたたる…これ以上は腹壊すぞ…」

ヴィータ「でも暑いし…」

零夜「まあ食べたければ食べればいい……どうなるかは知らんがな……」

零夜「昼御飯…何作ろうか…」

はやて「冷麺にせえへん？」

零夜「そうするか。」

はやて「それじゃ、いただきますー！」

「…………いただきます。」

ヴィータ「ん〜！やっぱりはやてとアニキの作った料理はギガうま  
だなー！」

シャマル「負けてられない…今度私も…」

「…………それだけは止めてくれ！」

シャマルの料理は…ダメだ…壊滅的とかの次元じゃない…

あれは暗黒物質だ  
いや、未元物質か？

まあとにかく不味いとかの話じゃない。

いや…もうアレは食べ物ではない…

一部見た目からヤバいのもあるしな…

食べた俺が3日間寝込んだからな。

さて…夜になった

…そろそろ…

行くか…

第10話 なんてことはないただの一日」…まあそれもいいか…」（後書き）

作者：さて…そろそろ本腰を入れますか…

零夜「まさか本気ではなかったのか!？」

作者：いや、俺の本領発揮の先を見せてやるよ…戦闘という名のな  
!!

続けてやるぞ

第11話 戦っている時こそ！俺も貴様も充実しているのではないのかッ！！

サブタイのネタが分かる方は居るでしょうか…？

あと、感想制限外しました

小説タイトル変更しました

今回も派手に行くぜ

第11話 戦っている時こそ！俺も貴様も充実しているのではないのかッ！！

深夜

零夜「……………こっちか……………」

俺は今、一人で町を歩いている。

はやてや守護騎士たちは全員よく眠っている。

何故、こんな事をしているかと言つと……

少し前から現れる、強力な謎の魔力反応を調べるためだ。

もし、はやて達に危害が加わるようならば、斬り捨て、撃ち抜かねばならない。

112

零夜「……………結界……………!!」

B i n g o ……

零夜「大当たりだ……………! 数日間粘ったかいがあった……………」

極夜『魔力や気配を隠さなくていいのですか?』

零夜「いや、いい。あの状況下で彼女達に気付かれるほど俺は弱くはないだろう？まずはただ隠れて観察だ。」

零夜「行くか…」

数メートル歩いた先

二人の魔導師…年齢は俺と同じくらいの女の子が…

白い服と黒い服…

その二人が今にもぶつかり合わんと対峙している。

よく見れば、間にはなにか…水色の宝石のような物が浮いている。

……ロストロギアの類か<sup>たぐい</sup>…

…あんなモンをあんな女の子達が欲しがるとはな…

恐ろしい時代が来たモンだけ…

……何で俺こんなオッサンくさいセリフ言ってんだ…？

俺…まだ9歳だぞ…

はやてと同じ年齢だぞ…

極夜『彼女達…話は終わったみたいですよ…』

零夜「む…このままだと戦うになるな…止めた方が…っってもう無理か…！」

二人ともぶつかり合おうと既に突っ込んでいる

極夜『……！何者かが転移してきます！』

零夜「何ッ……！」

二人の女の子の間に黒い服の一人の少年が割り込む。

零夜「……管理局員……か……。」

しばらく様子を見ようとした瞬間。

黒い服の女の子の側に犬のような耳の付いた女性が魔力弾を放つが、少年の障壁に阻まれる。

さらに撃ち続けるが避けられている

その隙に、金髪の黒い服の女の子が宝石を回収しようとした時、真つ黒少年が魔力弾を撃とうとしている。

まさか本気で撃つ気か！？

そして……発射された……

この距離では回避は無理だろう……

そう思った瞬間

魔力弾が叩き斬られた。

俺のバリアジャケットに似た、少しデザインが違う黒いコートの少年が手にした刀で切り裂いたのだった

そして、俺はその少年の右手に握られた刀から目が離せなかった。

なぜなら

色違いの極夜が握られていたのだから…

黒いコートと金髪少女と犬耳の女性がそのまま飛び去った

そして…無意識の内に、俺はそいつを追いかけていた…

そして追いつき…転送される前に…

俺は斬りかかっていた…

ガキン！

??「チツ…管理局か…!? フェイト！アルフ！先に行け…！俺がこいつを引き受ける…！」

フェイト「でも…火彩ひいろが…」

零夜「うおおおおお…！！！！！！」

ガキン！

火彩「急げ…！！コイツは俺の仕事だ…！！」

アルフ「フェイト…」

フェイト「…絶対帰ってきてね…」

ガァン！

ガキン！ガキンガキンガキン！

ギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリ！

キーン！

火彩「……………行つたか……」

零夜「…お前は何者だ……」

火彩「…どうした”刀夜”？もう終わりか？だらしないな。」

零夜「なんだと！負けているのはそつちだろう！！……………！？」

突然の問いかけに、俺は初めからどう返せばいいか知っていたかの  
ように返す

そして、”刀夜”と言う名前……

俺の名前は影宮零夜のはず…ならなぜ…” 刀夜”と呼ばれ、反応し  
た…

火彩「…ヤツパリな… ……会いたかった…会いたかったぞ！！  
刀夜アアアアア！！！」

ヤツ…ヒイロと言ったか…ヤツが突っ込んで来た

続く！

第11話 戦っている時こそ！俺も貴様も充実しているのではないのかッ！！」

作者：さて…そろそろ無印に介入を…

零夜「マジか…」

作者：させずにはやてとイヤイヤさせるか。

零夜「うおい！！／／／／」

はやて「え…ウチと…零夜君が…あわわわわ…／／／／」

零夜「はやてええええええええええええ！！しっかりしろおおおおお  
お！」

作者：ぶべらっ！！

バタッ！

零夜「作者が倒れたアアアアアア！？」

作者：我が生涯に…一片の悔い無し…



第12話 大切な思い出は決して消えることはない「…ああ…そうだな…」 (前)

今回は重要な話

第12話 大切な思い出は決して消えることはない「…ああ…そうだな…」

火彩「刀夜アアアアアア！！！！」

ガキイン！

零夜「クツ…俺は…刀夜なんて…名前じゃ……ない！！！！」

火彩「いいや！体は違おうとも、お前の魂は刀夜だ！！」

ガキン！ガキン！ガキン！

零夜「訳のわかんねえこと…言ってんじやねえええ！！」

シャキイン！

火彩「…チツ…やはり…記憶が…クソツ！」

ヤツの刀が燃え上がる

火彩「思い出せ！」刀夜”！！炎龍爪！！”

ゴウツ！

零夜「何なんだよ！お前はア！！雷龍爪！！！！」

バチッ！

「うおおおおおおおおお！！！！！！！」

ズガアアアアアン！！！！！！

零夜「ソウル！！」

ソウル『やっと出番だ！！任せとけ！！』

極夜を待機状態に戻しながら、ソウリイーターを展開する。

火彩「フツ…なら！白夜！」

白夜『了才解だア！モード2！バスターソードオ！』

日本刀が巨大な片刃の大剣に変形した。

火彩「サア！行くぜ！」

だが！！

零夜「うおらアアアアアアアアア！！フラッシュセイバーアアア

「アア！！」

高速で踏み込みながら薙払うように斬り込む。

「ガギイイイン！」

「火彩「うおッ！？」

「ドゴオン！」

大剣の腹で防がれるが、無駄だ。

衝撃で吹き飛ばしてやった。

「だがまだ終わらん！」

「バチッ！バチバチバチ！」

激しく帯電し、黒い雷が刀身に集まって行く

「零夜「ライトニングドライブ！」」

刀身に集まった雷を吹き飛んだヤツにお見舞いする。

バチバチバチバチバチバチバチ

ズガアアアン！

火彩「無駄だ。」

ヤツの前に黒い霧のような壁が発生し、ライティングドライブを防いでいた。

火彩「さて…これで少しは思い出せ…よッ！！」

バチバチバチバチバチバチバチバチバチバチ！！！！

零夜「どう言うことだ！何故俺の黒雷を出せる！？」

火彩「…これはお前がやっていたことだぞ？」刀夜”。

零夜「は？」

火彩「…はあ…ヤツパリか…マズは話を聞いてもらわなきゃならんな…」

零夜「何なんだよ……」

火彩「俺の名前はやみさきひいろ闇咲火彩、魔力は影と火炎の魔力変換資質、戦士《ソルジャー》の一人……」

影……聞いたことがないな……

火彩「一応、影の魔力はお前が使っていたんだぞ？それに俺とお前で伝説とか言われてたらしいしな……」

零夜「俺が……？お前と……？……うっ……！」

頭が……痛い……！？

火彩「おい！？大丈夫か！？」

なんだ……これは……！？

頭の中に……何か……

「……うっ……あ……あ……」

「んなっ!?!」

「…勝負あり…だな…」

「チエツ…これで100戦40勝40敗20引き分けか…」

「記念すべき100戦目は俺の勝ちだな!火彩!」

「次は負けねえぞ!刀夜!」

「刀夜!そろそろメシにしようぜ!」

「慌てるな火彩…落ち着け…!」

「……ざっと1000000……か……相変わらず無茶だな……火彩……」

「ハッ！刀夜……お前は人のことは言えないだろ……」

「さて……そろそろ行くか？」

「ああ……行くか……」

「夢を抱け……」

「ソルジャー戦士の誇りは……！」  
「絶対に忘れるな……！」

シャキーン！







火彩「ああ…それはな…時空管理局が俺達を蘇らせようとしたらしくてな…何せあの時死んだ後…どう言うわけか、伝説の戦士達とかなんとか言ってるちょっと有名になったらしくてな…まあ…肉体は…子孫の体らしいけどな…」

零夜「…とにかく…問題は管理局か…やはり腐ってやがるな…」

火彩「厳密には、”上層部”がだいな。」

零夜「…うかつにつぶしにはかかれないな…」

火彩「オイオイ、何百年かぶりに親友同士が再会出来たんだ、しけた話はまた今度にしようぜ。」

零夜「まあ…魂は再会できた訳だから…」

続く…

第12話 大切な思い出は決して消えることはない「…ああ…そうだな…」(後

作者…：今回はふざけねえぜ…さすがにな…

零夜「…。」

火彩「…。」

作者…：……。

続く…のか…？

第13話 懐かしい思い出は何時も綺麗なのさ……それでもいいじゃないか……

さあ、今回は零夜と火彩の会話だけ

ゆえに短いです

だが

派手に行くぜ

第13話 懐かしい思い出は何時も綺麗なのさ……それでもいいじゃないか……

火彩「英雄になりたければ夢を持って、戦士の誇りは決して忘れるな、魂は常に強くあれ。」

零夜「俺が言った言葉だな……覚えてたのか……」

火彩「そつだ……戦士ではお前のほうがもともと先輩だったんだよな……」

零夜「ああ……」

火彩「いまはどうよ？何やってんだ？」

零夜「まあ家族と楽しくやってるさ。お前は？」

火彩「フェイト……さっきの子と捜し物をな。」

零夜「それは、あの水色の宝石みたいなヤツか？」

火彩「ああ、ジュエルシードと言っらしいんだが……」

零夜「……なるほどな……お前は……（ニヤニヤ）」

火彩「……なんだその（ニヤニヤ）って……」

零夜「いや、何でもない。」

火彩「お前はどうなんだ……」

零夜「まあ…色々あったな…住んでた世界が吹き飛んで、両親は生きてんだか死んでんだか分からないし、地球に飛ばされて、…まあ…今は知り合いに居候させて貰ってる。」

火彩「へえ…今度、暇ができたら行っても良いか？」

零夜「ああ、いつでも歓迎だ…」

零夜「…もう夜明けか…」

火彩「昔も…こうやってよく日の出を見たよな…」

零夜「ああ…」

火彩「…懐かしいな…」

零夜「…：…そう言えば…帰らなくて大丈夫なのか？彼女達が心配してるんじゃないのか？」

火彩「そうだった…！悪い！また今度会おう！」

零夜「ああ……！じゃあな……」

……

火彩「……ただいm「火彩！」あぐぼああ……！」

フェイト「火彩おお……全然帰ってこないから心配したんだよ……」

火彩「あー……すまん……色々あってな……」

フェイト「あの人は……誰？」

火彩「ああ…アイツはな…俺の大切な…」

-  
- 親友だ  
-  
-

続く…

第13話 懐かしい思い出は何時も綺麗なのさ…」「それでもいいじゃないか…

作者：思い出って結構美化して行くよな

零夜「一部な。」

火彩「古いほどな。」

作者：すぐ記憶が消えていく俺が言うなって話だがなwwww

零夜「アレか、お前昨日の晩飯覚えてないとかそんなんだろ。」

火彩「昔の話だされたら、（俺は過去を振り返らない）とか言っ  
てごまかすパターンだな。」

作者：いや、ストレートに覚えてないと言うのが？と言うか…興味な  
いね…

続くと思われる

第14話 あまり家族に心配はかけるなよ」「お前が人のことと言えるのかよ……」

今回は怒られる話

何？

訳が分からないよ？

なら本文を読むんだ。

派手に行くぜ

第14話　あまり家族に心配はかけるなよ」…お前が人のこと言えるのかよ」

零夜「4…30…よし…まだみんな寝てるな…」

つてか俺傷だらけじゃないか…不味いな…俺治癒魔法なんか使えな  
いぞ…

まあほつとけば治るだろうが、あまり心配を掛けてはな…

まあいいか

そんな事より…眠いな…

零夜「2時間程寝るか…」

本当に2時間後

零夜「うん…？うあああ…：…本当に丁度2時間かよ…：」

さて…そろそろ起きなければな。

零夜「はやて、おはよう。」

はやて「あ、おはよう零夜君。」

相変わらず朝早くから凄いよな……

零夜「んじゃ、何作る？」

はやて「……その右腕……！どうしたん！？凄いケガしてるけど……！」

零夜「ああ、これが、ちょっと5時位に外走つて思いっきり転けたんだ。」

……ってか……これ火傷じゃないか……不味いな……火彩と戦ってたから……  
アイツの蒼炎が……

はやて「とにかく、後でシャマルに見てもらわな！」

マズい……！バレる……！

零夜「だ、大丈夫大丈夫！これくらいすぐ直るって！ははははははは……」

はやて「……ていつ！」

零夜「……ぐっ……」

傷口を叩くとは……なかなか……！

だがソルジャーをなめてもらってはこまる！

こちらら全身に銃弾浴びて剣で切り裂かれて、大砲の直撃を食らっても生きてるのだよ！

だから傷を軽く叩かれた程度では……

はやて「……ていつ！」

零夜「うがあっ!？」

まさかの締め付け……だと……!？

力が入ってないのに……痛い……だと……!!

はやて「ヤツパリ無理してる！」

零夜「……大丈夫だ……問題ない……」

はやて「死亡フラグ建ててどないすんねーん！」

バコーン！

零夜「うおおおお…痛てえ…」

はやて…どっからハリセンだしたんだ…

ガチャ…

シャマル「おはようございます、はやてちゃん、零夜君…って…どうしたの！？その腕！？」

零夜「…朝から走って思いっきり転けた…」

シャマル「これ…転けたとかじゃないでしょ！明らかに火傷じゃない！」

零夜「……………」。

はやて「れえええいいいいやああくううん！！？何があつたんやあああ！？何してたら火傷なんかするんやあああ！？」

シャマル「とにかく、すぐ治療しますから！後で話はきかせてもらうわ！」

朝から憂鬱だ…

ツイてないぜ全く…

はやて「で？朝早くから何してたんや！？」

零夜「え〜…色々細かい話を飛ばすと…深夜からずっと親友と大ゲンカしてました…」

「「「「友達いたのか！」「」「」」

零夜「……………居るよ…一人だけ…」

ヴィータ「て言うか…どんなケンカしたら腕に火傷に全身傷だらけになるんだよ…」

零夜「刀で斬り合いを……………こっちは黒雷、あっちは蒼炎を纏いながらだけ。」

「……………それはケンカじゃなくて殺し合いだ!」「……………」

零夜「なん…だと…」

ちなみに今の俺の表情

(。 。 ;) なん…だと…!?

零夜「昔からこうだったからな…」

シグナム「昔って…4歳から歳くらいからそんな事してたのか…?」

零夜「あゝ…そこそこ説明しなければな…」

続く…

第14話 あまり家族に心配はかけるなよ」…お前が人のこと言えるのかよ…」

作者：家族に心配を掛けるなよ

零夜「アンタが他人のこと言えんのか!！」

作者：うるせえ!お前よりはマシだ!

零夜「言ってるのはお前の頭がだよ!！」

作者：黙れッ!!そんなお前ッ!修正してやるッ!

バコーン

作者：ガハッ…

はやて「これでよし。」

零夜「はやて…ハリセンなのに物凄い音になったんだけど…そして作者が気絶してるんだが…」

はやて「気にしたらあかんよ」

作者：なかなかやるじゃねえか…グフッ…

続かないと思っていたのか！

第15話 俺は英雄じゃない、これまでも、これからも……お前は英雄じゃない

今回は零夜の昔の回想 part 1

サブタイのネタわかる人いるかな……

ヒントは某固体金属の歯車の蛇

派手に行くぜ

第15話 俺は英雄じゃない、これまでも、これからも……お前は英雄じゃない

零夜「そうだな…何処から話すかな…まああの辺で良いか…あれは…もう何百年も前…古代ベルカの時代…ああ、はやてに分かるように言えば…丁度日本の戦国時代くらいだな…まあその頃俺はある傭兵団に居たんだが…」

……

火彩「刀夜！オイ刀夜！」

刀夜（零夜）「なんだよ火彩…うるせえな…」

火彩「お前、正気か！？この傭兵団を出るなんて、何考えてるんだ！？」

刀夜「…火彩…俺はもう無意味な戦いは嫌なんだ…金だけ貰って、戦い、人を殺し、全てを破壊し…消し去る…それが…それが何になるんだ…！」火彩「だからって、どうするつもりだ！？傭兵団を抜けて、傭兵を続けるにしても、依頼主クライアントをどうやって探すつもりだ！？」

刀夜「…もう…俺は傭兵ソルジャーにはならない…！」

火彩「…お前…じゃあ…普通の生活をするのか！？」

刀夜「いや…俺の手は…もう血で汚れすぎているさ…何より…俺の血が…細胞が…遺伝子が…俺のありとあらゆる全てが戦いを欲している…もう普通には戻れないさ…！」

火彩「だつたら！此処にいるよ！！此処でなら！お前は普通に居られるだろ！」

刀夜「けどな…火彩…俺はな…やりたいことが見つかったんだ…！」

火彩「やりたいこと…？」

刀夜「もっと…もっとたくさんの人々の為に戦う…金額だけで依頼主クライアントの指示を聞くのではなく…もっと”心から助けを求める人達”のために…俺は戦いたい…傭兵ソルジャーとしてではなく…1人の戦士ソルジャーとして…！」

火彩「戦士ソルジャー…！」

刀夜「それに…団長にはもう話は付けてある…」

火彩「……。」

刀夜「…俺は…明日の朝には出発する…だから…しばらく1人にさせてくれ…」

火彩「…わかった…」

.....

刀夜「さて…行くか…」

ドアを開けると、火彩が立っていた

刀夜「…火彩…」

火彩「見送るよ…」

刀夜「…ああ…」

火彩「…」

刀夜「…懐かしい…な…2人でよく失敗をやらかして、団長に謝りに行ってたよな…」

火彩「ああ…そうだな…「自分で戦車潰しちゃいました！」とか、「足止めのはずが間違っで全滅させてしまいました！」とか。」

刀夜「その後、団長に何故か「なかなかやるようだが、儂を超えるには、まだまだだな！ワツハツハツハツハ！」とか言われたけど。」

火彩「全く…良い人なんだか…バカなのか…」

刀夜「けど…強さは本物だな…力も心も…」

火彩「頭の良さもな…」

刀夜「さて…見送りは、門まででいいぞ、火彩。」

ガチャ…

「「「「「「「「刀夜さん！本当に此処を出るんですか！」「」「」「」

たくさん仲間達が建物の外に来ていた。

行かないでくださいよ！

とか

何でなんですか！？

とか

色々と聞かれる。

刀夜「…すまない…」

俺には謝る事しかできない。

団長「コラコラお前ら！そんなんじゃ刀夜が旅立てないぞ？いくら龍神傭兵団最強の雷光ライティングシャドウの影と呼ばれてるからって、ずっと個々に居てくれる訳じゃないだろ？」

刀夜「団長…」

団長「ま、気持ちは分からんでもないがな。今や刀夜と対等に戦えるのは火彩位だからな。」

火彩「対等すぎて決着がつきませんがね…」

団長「…まあ…とにかく…刀夜！何かあったら儂らに言え！お前は離れても儂らの仲間だ！そして何時でも戻ってきてかまわないぞ！」

刀夜「ありがとうございます…団長…」

火彩「刀夜…元気でな…」

刀夜「火彩…ああ…！」

刀夜「じゃあ！また会おう！みんな！」

火彩「行った…か…」

団長「これからは、お前さんに頑張ってもらわなきゃならんな、火彩。」

火彩「ええ…」

団長「アイツに言われて初めて気付いた…今までの儂らがどんな戦いをしてきたのか…」「ただ戦うだけでは駄目だ…！」か…」

火彩「…俺も同じ事を言われましたよ…」

団長「しかし…儂らは…戦うことでしか自分を表現できない…だから…せめて…人の為に…戦うことにしよう…」

火彩「…はい…！」

団長「さあ！みんなを集めてくれ！みんなにこれからのことを話さなければならん！」

刀夜「さて…まずは何処に行くかな…」

極夜『魂に従って進むとか言っただけでなかったか？』

刀夜「だから迷ってたんだろうが…」

極夜「目的地が無いくせによく言っただけ。」

刀夜「ま、いいか…適当に進むとしよう…」

続  
く  
…

第15話 俺は英雄じゃない、これまでも、これからも……お前は英雄じゃない

作者：回想が予想以上に長くなってしまった……  
まさか分けるハメになるとは……

零夜「下書き書いたんじゃないのか？」

作者：なんか改変し過ぎて原型がなくなりつつある……

零夜「しかも授業中に下書き書いてたんだって？」

作者：懐かしいねえ……中3を思い出すなあ……

零夜「確か作者火曜日から中間テストじゃ……」

作者「テスト？興味ないね。」

続く……だと……

第16話 フラグは建てすぎるのは良くない」…お前は死亡フラグ建てまくっ

零夜の回想 part 2

やばい、過去回想編だけでかなり長くなりかねん。

派手に行くぜ

第16話 フラグは建てすぎるのは良くない」…お前は死亡フラグ建てまくって

刀夜「さて…次は何処に行くかな…」

あれから、2年が過ぎた

俺は戦士<sup>ソルジャー</sup>として、あらゆる世界を巡り、人助けをしていた

わかりやすく言えば旅する何でも屋だ

今は砂漠のど真ん中を歩いている

刀夜「…流石に…暑いな…」

砂漠を大量の水と少しの食料でわたろうなんざ無茶だったか…

まあ金なかったから水しか買えなかったんだが。

まあしばらく歩き続けた…

刀夜「あゝ…くそっ…ふらふらする…今何処だ…？」

俺は地図を取り出す…

刀夜「いまが…このオアシスか…ベルカの王国の近くだな…行ってみるか…」

俺は夜になる前にはベルカにたどり着けた。

入るのに少し時間はかかったがな…

戦争やってるから仕方ないか…

と…まあ俺は城下街にやってきた

此処なら宿もあるし、情報も手にはいるだろうしな。

刀夜「…へえ…なかなか良い街だな…」

極夜「全くだ。戦争中とは思えんほど綺麗な街だな。」

刀夜「とにかく、今日は宿を探そう。一番安いところだな。」

極夜「…野宿でよいのではないか？野宿ならタダだぞ。」

刀夜「バカか…野宿だと深夜に見つかったら面倒なことになるだろう…」

極夜「それはそうか…戦争中だから敵が潜入してきたみたいに勘違いされたらたまったもんじゃないしな。」

刀夜「…どこが一番安いだろうか…誰かに聞くか………」

俺はたまたま通りかかった通行人に尋ねた。

どうやらこの先の路地の角の所らしい。

刀夜「ありがとうございます…では………」

歩いていると…挙動不審な金髪の少女を見かけた。

周りをキョロキョロと見渡している。

道に迷ったのだろうか…

残念ながら俺はお人好しなので、そう言うのは放ってはおけないのだった…

刀夜「…大丈夫かい…？」

??「え…あ…いや…」

刀夜「…道に迷ったのかい？」

??「いえ…そう言う訳では…」

刀夜「…家出…か…？」

??「え…ええ…まあ…そんな所です…」

刀夜「…帰った方がいい…この国は戦争中なのだろうか？いつ何が攻

めてくるか分からない…死にたくなければ悪いことはいわない…」

??「…家の中にも…何も変わりません…何処に行っても…結局戦いばかりです…」

刀夜「…なら君は…何故人々が戦ってると思う?」

??「え…?」

刀夜「どう思う?」

??「…わかりません…何故みんな戦っているのか…」

刀夜「少し難しかったかな?けど、この答えは人から教えてもらっては駄目なんだ…自分で気付かなければならないモノだからね…」

??「自分で…」

刀夜「…すまない…話がだいぶそれてしまったね…君は家出したのはいいがどうしようもなく途方にくれていた、そして家には帰りたくない…そう言うことでいいか?」

?「…はい…」

「一番安い宿でいいなら、付いてくるといい…まあ…数週間くらいはこの街にはいるからな…どうする?」

?「お…お願いします…」

顔が紅いな…何でだ?まあいいか

刀夜「おっと…自己紹介がまだだったな…俺は影宮刀夜。戦士ソルジャーをやっている。」

？「戦士ソルジャー？」

刀夜「分かり易く言えば、世界中を旅する何でも屋と言ったところだな。」

？「わ…私は…えっと…えっと…ヴィヴィオと言います！」

よく見たら赤と緑の虹彩異色の瞳か…随分珍しいな…  
…ん…  
？…どっ…かで…気のせいか…

刀夜「じゃあヴィヴィオ、いくか。」

ヴィヴィオ「はい！」

刀夜「ッ！伏せる！」

ヴィヴィオ「え？きゃあ！？」

俺はヴィヴィオを抱え込み、地面に伏せた

刹那、ヴィヴィオの頭があつた場所に弾丸が飛んできて、地面にめり込んだ

刀夜「そこか！」

一瞬何かが光つた瞬間に俺は雷を放つた  
黒雷は夜には認識しにくい

叫び声が聞こえてきた

直撃だな

続  
く  
…

第16話 フラグは建てすぎるのは良くない」…お前は死亡フラグ建てまくって

作者：はつきりとしたStsフラグとVividフラグを建ててる俺。

零夜「死亡フラグの塊の作者が死亡フラグ以外を建てるのは珍しいな。」

作者：もはや存在そのものが死亡フラグと化してしまったぜ

零夜「行動、言動、ほとんど全て死亡フラグだからな。」

作者：中学時代で50000本くらい死亡フラグ建てたぞ。まだ回収されてないけど。

零夜「されたらダメだろ…」

作者：いつでも死ぬ覚悟はできてるぜ

続ける…！続けてみせる！

第17話 秘密を暴露されたからといってショックを受けるとは限らない」…

あまりびっくりされなかったサプライズとかね。

今回は戦い！戦闘！バトル！

派手に行くぜ！

第17話 秘密を暴露されたからといってショックを受けるとは限らない」……

次の日

刀夜「さて……」

一応、何も無かったな……

しかし……昨夜の狙撃は明らかにこの子を狙っていた……

何故この子が狙われた……？

金髪で虹彩異色、色は紅と翠……

やはりなにか引つかかる…

ヴィヴィオ「…ん…」

刀夜「…起きたか…」

ヴィヴィオ「…ん…ん…おはようございます…刀夜さん…」

刀夜「ああ…おはよう…」

何にせよ、昨夜のヤツだけで終わると思えん。

十分に警戒するか…

いや、狙われるなら何かある…家に帰すべきだろうか…

しかし本人がそれを拒んでいる…

さて、どうするかな…

ヴィヴィオ「あの…刀夜さん…？」

刀夜「ああ、すまなかつたな…朝食、食べに行くか。」

ヴィヴィオ「はい！」

俺とヴィヴィオは朝から市場を歩いていた。

ヴィヴィオは昨日とは違う髪型になっている

昨日はくくっていた髪を今日は下ろして、前髪で片目を隠している

オッドアイを隠すためか？

まあ珍しいからな…

刀夜「おっ、美味そうな果物だな…少し買ってみるか…すみません、これを4つ…」

「あいよゝ4つだな〜！」

店主よ、なぜ俺達をニヤニヤしながら見る。

「ほい！」

刀夜「……店主…なんか色々多いんだが…」

「オッサンからのサービスだ！兄ちゃん、旅人だろ？この辺じゃ見ない顔だからな。」

刀夜「まあ…そうですね…」

「その可愛い嬢ちゃんも、あまり見かけないけどな。」

ヴィヴィオ「え…ええ…まあ…あまりこっちに来てないですから…」

刀夜「じゃあ…そろそろ行きますので…」

「おう！あんがとな！また来てくれよ！」

刀夜「さて…ヴィヴィオ…何か欲しい物は…」

つて…なんじゃそりゃあああ！！いつの間にそんなに大量の物を  
買っていたんだ！？！

ヴィヴィオ「禁則事項です」

心を読むなあああ！！

つてあれ？もしかして…俺より金持つてる！？

刀夜「負けた…」

ヴィヴィオ「？どうかしたんですか？」

刀夜「気にするな…自分の儲けの少なさと言う絶望に打ちひしがれ  
てるだけだから…」

14歳ぐらいの少女に負けてる俺って…

つらいな…

泣けるぜ…

と、まあいつまでも絶望に打ちひしがれてる暇は無いので、昼にな  
ったので昼食を食べることにする

だああ！！やっぱりここでもって自分に対する絶望があああ！！！！

んでもって夜

ヴィヴィオ「今日は楽しかったですね」

刀夜「あ…ああ…」

俺は精神がボロボロだけどな…

そう言えば、こんな噂を聞いた

『この国の次期王女が行方不明だ』

…きつと重圧に耐えきれずに逃げたのだろう…

刀夜「この国も大変だな…次期王女かなんかが行方不明らしいし…」

ヴィヴィオ「うえっ！？え…ええ…そ、そうですね…」

刀夜「全くだ…！！…ヴィヴィオ…急ぐぞ…！」

ヴィヴィオ「え？」

刀夜「昨日のヤツか…その仲間だ！」

マズいな…俺一人だけなら全員瞬殺できるが…

刀夜「ヴィヴィオ…どこかに行き止まりは無いか？」

ヴィヴィオ「えと…たしかこっちです！」

刀夜「よし……良い場所だ……上に天井もある……居るのはわかってい  
る……全員、出てこい……… ヴィヴィオ……下がってる……」

ヴィヴィオ「は……はい……」

1、2、3、4……20人か……多いな……

刀夜「……貴様等が何者かなど聞かん。……即刻、斬り捨ててやる。」

「ほざけ！やれるものならやってみろ！」

「死ねえええええ……！」

雑魚ふたりが剣をもち、飛びかかってくる

実力差を見極める……

刀夜「まず二人。」

シャリン！

パチン…

神速の抜刀術でまず二人を斬り捨てる

「あ…が…！」

「あぐががが…！」

ドサッ

地面に落ち、絶命。

刀夜「次！」

一足飛びで三人固まって居るところに飛び出し

刀夜「タアッ！」

飛びこみながらの回転切り

さらに回転を加え、極夜を鞘に納めながら再び飛び出し、回転を加えながらの抜刀術で二人仕留める。

そして地面に着地

すぐさま黒雷を放ち、三人痺れさせつつ近づき

刀夜「雷龍爪！」

黒雷を纏った状態で斬りつける。

「くっ…撃て!!」

4人、銃を撃ってくる

ババババババババババババババ…!

カンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカン  
カンカンカンカン!!

刀で銃弾を斬り捨てながら飛び込み

刀夜「雷龍翼！」

刀の攻撃範囲を雷で延長して、4人全員を斬る。

4人同時に絶命

「ダメだ！逃げろ！」

「勝てるわけ無い！」

二人逃げだそうとする

だが、逃がさん

刀夜「雷龍破!!」

刀に黒雷を纏わせ、突き出す

刀の先端から雷撃が飛び出し、龍のような形になり、逃げだそうとする二人を容赦なく殺す。

残り6人

「うっ…うわああああ!!」

一人が発狂したのか、剣を無茶苦茶に振り回しながら、突っ込んでくる。

刀夜「極夜、モード4」

極夜「了解。」

極夜を二挺銃に変え、眉間に銃弾を二発撃ち込む。

残り5人

「トリヤアアアア！」

剣を投げつけてきたか。

大方、捌いた一瞬の隙に魔力弾でも撃ってくるつもりだろう

刀夜「無駄。」

B a n g ! B a n g ! B a n g ! B a n g !

まず二発で剣を”消し去り”残り二発で本人を仕留める

残り4人

刀夜「極夜、モード2」

極夜「了解」

今度は両刃の大剣に極夜を変える

刀夜「フラッシュセイバー！」

一足飛びで踏み込みながら、一人斬り殺す。

刀夜「ソードスピアー！」

極夜を投げつけ、また一人の腹に突き刺す

「隙あり！！」

一人が俺が武器を持ってない隙に切り込んでくる。

だが

刀夜「来い！極夜！」

極夜「了解！」

極夜は瞬時に俺の手元に戻り、相手の剣を受け止める

刀夜「ハッ！」

すぐさま剣を押し返し

刀夜「極夜！モード3！」

極夜『了解！』

今度は長刀に姿を変え、押し返した相手を相手の間合いの外から斬り捨てる。

最後の一人

「…よくもやってくれた…私の部下を皆殺しとはな…」

刀夜「心配するな、今から貴様も後を追う事になる。」

「…そう簡単に行くかな？」

俺も相手も刀を構える

轟ッ！！

一足飛びでぶつかり合う

刀夜「……。」

「くっ…流石は…雷光の影と言うことが…」

刀夜「…何故…わかる…」

「黒雷をはなち、刀を持つ者など、雷光の影、影宮刀夜しかいない…まさか…こんな所で…次期聖王女、オリヴィエ・ゼーゲブレヒトを連れて歩いているとは思わなんだが…なッ！」

刀夜「…チッ…」

なるほど…金髪に紅と翠の虹彩オッドアイ異色…

どちらも聖王家の特徴だな…

まあいい。

刀夜「貴様は…大方、敵国…いや、この国の王家の人間の暗殺部隊…  
…といったところか…」

「さあな…」

刀夜「だが関係ない。今から貴様を…斬る…！」

シャキン！

「ぐ…が…」

ドサッ…

刀夜「八刀一閃…長刀による八回の斬撃を超神速で叩き込む…貴様には太刀筋すら捉えられなかっただろ…」

「流石は雷光の影…いや…戦士…ソルジャー…です…最後に貴方と戦えて…良かった…」

刀夜「…ヴィヴィオ…いや、オリヴィエ・ゼーゲブレヒト…」

オリヴィエ「…すみません…」

刀夜「……。」

「???」オリヴィエから!…!」

刀夜「!？」

????「離れるおお!!!!」

刀夜「くっ…」

何て力だっ!

刀夜「うおッ!？」

まさか吹き飛ばされただと!?

オリヴィエ「ク…クラウド!?!何故ここに…!!」

クラウド「貴女が行方不明と聞いて、探しに来たんですよ!!あの男が連れ去ったのですね!？」

オリヴィエ「あ、いや、違います」「うおおおお!!!!」「あ…」

クラウド…

まさかクラウド・G・S・イングアルドか？

霸王…か…

やれやれ…王様二人が揃い踏みか…

まあ…

どうでも良いな

刀夜「うおらああ!!」

黒雷を放ち、牽制する

クラウド「くっ…」

刀夜「タアッ！」

クラウド「うわあっ！」

刀夜「ハア…ハア…ハア…」

クラウド「…まだ実践では試したことはないけど…！やるしかない！」

刀夜「…少し落ち着けよ…」

クラウド「おおおおお！食らえええええ！断空拳！！」

なるほど…足から練り上げた魔力を拳に載せて放つ…か…悪くないな…だが…

刀夜「遅い。」

軽く避ける

クラウド「なっ！？」

チャキツ

刀夜「勝負有り…だな」

長刀を首に突きつけ、いつでも斬り捨てる事ができるようにする

クラウド「くっ…」

刀夜「…少し頭を冷やせ…」

バコッ！

クラウド「あ痛っ！」

オリヴィエ「人の話は最後まで聞きなさい！この方は、私を助けてくれた人ですよ！」

クラウド「え…」

続く…

第17話 秘密を暴露されたからといってショックを受けるとは限らない」……

零夜「おい！八刀一閃って完全にパクリじゃないか！」

作者「まあなwww」

零夜「笑い事じゃねえよ！」

作者「いや、友達にな、「FFのセリフを一部に使ってんなら技も出せよ、ファイガとかサンダガとかさー」って言われたからなwww  
「w  
」

零夜「だからとって何で八刀一閃なんだ！」

作者「いいじゃん別に。超究武神霸斬（ACC）くらわせるぞ！」

零夜「お前合体剣持ってないだろ！」

作者「うっせー！ナイフで代用じゃー！！食らいやがれ！超究武神  
霸斬！」

零夜「おわっ！」

作者「あ、避けられた！腰いてええええええ！！！」

まだ続くのか…

第18話 何をするか決めるかは自分自身が決めることだ」…まあそつだな…」

今回はまあまあ深い話

派手に行くぜ

第18話 何をするか決めるかは自分自身が決めることだ…まあそつだな…

クラウド「ホントーーーーーにすいませんでした!!!」

刀夜「あ、いや、もういいから…」

クラウド「なんとお詫びしていいやら…」

このやり取り5回目…

よし、話を無理矢理変えるか…

刀夜「…あ、そうださっきの技…なんだった…?」

クラウド「断空拳…ですか?」

刀夜「そうそう、その断空拳だけだな、なかなか良い技だが…スピードが足りないな。」

クラウド「スピード…ですか…」

刀夜「並の相手ならあのスピードで十分だがな…攻撃力を少し下げ  
てスピードを上げてみる、いくら強い攻撃でもあたらなきや意味が

ないからな…さっきのは俺にとっては止まってるようにしか見えなかった。」

クラウド「なるほど…」

オリヴィエ「なんで私を放置するんですかああー！ー！ー！っ！！」

刀夜「あ、スマン。」

オリヴィエ「全く…」

クラウド「すいません…」

刀夜「…で……これからどうするんだ？」

オリヴィエ「……。」

クラウス「やはり…帰ったほうが…」

オリヴィエ「けど…」

刀夜「…君は何がしたい？」

オリヴィエ「え？」

刀夜「君の魂は…何と言ってる？」

オリヴィエ「魂…」

刀夜「心は…？何がしたいと言っている？」

オリヴィエ「……。」

刀夜「俺は何も言わない。ただ、俺は一言…言っただけだ。」

オリヴィエ「私は……」

刀夜「ま、難しいか。」

オリヴィエ「私は……」

クラウド「…貴方は……」

刀夜「ああそうだ、まだ完璧に自己紹介をしてなかったな…ソルジャー戦士いや、こつちを言ったほうがわかりやすいな…元…ソルジャー龍神傭兵団、兵士ソルジャーランク0、ライトニングシャドウ雷光の影…影宮刀夜…」

クラウド「あの雷光ライトニングシャドウの影ですか!？」

オリヴィエ「あの有名な……」

刀夜「ホントはあんまり言いたくないんだ……色々面倒だから……俺がやってたことが原因なんだけどな……」

……俺は……今まで何人も……数えられないほど人を殺してきたからな……

刀夜「さて……俺はそろそろ行く……こんな俺といたら……ややこしいことになるぞ……帰るなり、どこかへ行くなり、君が決めるんだ……じやあな……」

オリヴィエ「……はい……」

オリヴィエ「クラウド…私は…帰ります…やはり、誰かがこの国を  
治めなければなりません。」

クラウド「では…送っていきます…」

オリヴィエ「（なぜ人々が戦うか…まだ判りませんが…必ず  
見つけてみせます…！刀夜さん…！）」

刀夜「さあて…次はどこに行くかな…」

カチヤ

刀夜「ん？なんか踏んだか？…なんだこりゃ？」

小さなひし形の水色の宝石？なんでこんなところに？

刀夜「うおっ！？」

突然宝石が輝きだす

そして

俺はその宝石から出た光に包まれ…

俺はベルカから消えていた…

続  
く  
…

第18話 何をするか決めるかは自分自身が決めることだ」……まあそつだな……」

作者「はああああ……」

零夜「どうした？」

はやて「テストがぐだぐだだったみたいやな」

零夜「じゃあ勉強しろよ！」

作者「だるい」

零夜「ヲイ」

続くしかないなWWW

第19話 面倒な事態が続けて起きると呆れる」…むしろイライラする」(前書

まーた厄介な事になった刀夜

派手に行くぜ

第19話 面倒な事態が続けて起きると呆れる」…むしろイライラする」

刀夜「うおおおおおおおおお！？」

ズガアアアアアン！

刀夜「痛てて…何処だ？ここは？」

周囲は何もなく、荒野が続いていた…

いや、刀や甲冑…兜も転がっている…

刀夜「…戦場か…」

これはまた厄介な場所に…

刀夜「とりあえず…逃げるか…巻き込まれると面倒だ…」

脱出だ！！

刀夜「…なんか…随分でかい街に着いちまったな…」

……なんかみんな妙な格好してんな…

ぱっと見、一枚の布を服にして、紐で縛ってるようにしか見えん…

いや…この場合、俺が変なのか…？

今俺は漆黒のロングコート…

…凄い周囲の視線が厳しいな…

とにかく、

ここが何処か誰かに聞いてみるか…

刀夜「…すみません…ここって…何処かですかね…」

やっぱり通行人に聞く俺。

「ここか？ここは、大阪だが…」

オオサカ？ナンダソレハ…  
初めて聞いたな…

刀夜「ありがとうございます…」

とにかく…何故俺が此処に来たのか調べねば……………いや、この  
の宝石以外思いつかん…

刀夜「…どうしたもんかねえ……」

??「ちょっとちょっと！そこのお兄さん！」

刀夜「とにかく…此処がどこの世界か調べて…」

??「おーい！聞いてる？」

刀夜「見たところ…魔法を使ってないな…魔法文化が無いのか…」

??「話を！！」

刀夜「ん？」

??「聞かんかい！！」

刀夜「イテッ！」

??「さっきから呼んでなのに無視しやんといてくれる！？？」

亜麻色の髪の短い少女が、俺の頭を叩いていた。

刀夜「ああ…すまない…少し考え事をしていてな…」

??「だいたい、どうやって元の世界へ帰るかなー?とか考えてたんやろ?」

刀夜「…まさか…お前も…」

??「そ、私もお兄さんと同じように、別世界から来たんや。こんな所で話も何やから、とりあえず私の家に来て!」

刀夜「分かった。」

?「ほんなら、まずは自己紹介やね、私は美月<sup>みつき</sup>、一応出身はベルカ。

歳は16、よろしく！」

刀夜「俺は刀夜、影宮刀夜だ。出身は…分からん。一応ベルカから飛ばされてきたんだが…歳は19だ。こいつは俺の相棒、極夜。」

極夜『よろしく。』

美月「刀型のデバイスか…なかなかかつこええな！刀夜さんにぴったりや！」

刀夜「そいつはどうも。」

美月「そや、私の相棒も紹介しとこか、おいで！」

…はい？なぜに呼ぶ？

？「はいはい！何ですか？美月ちゃん？」

美月「紹介するわ、私の相棒、ユニゾンデバイスの風花<sup>ふうか</sup>。」

刀夜「ちっさ！」

俺の手のひらぐらいのサイズの人形みたいな少女が飛んできた。

風花「むー！失礼です！私はちゃんと普通の大きさにもなれます！」

刀夜「あ、そう。それは悪かった。」

風花「で、美月ちゃん、この人は誰ですか？」

美月「刀夜さんって言って、私らと同じように別世界…ベルカから飛ばされてきたんよ」

風花「そうでしたかー！」

刀夜「ここは何なんだ？見たところ、魔法文化は無いようだが…」

美月「さあ？魔法を誰も使われへんからなあ…」

刀夜「困ったもんだな…しかも戦いが起こってるんだろ？」

美月「まあな。でも、この街は大丈夫や。独自の防御策とかがある

から、一回も戦闘は起きてへん。」

風花「しかもここは商業の街ですからね、色んな人が集まってくるのです！」

刀夜「今この世界では、何が起こってるんだ？」

美月「全国の武将…まあ王様みたいなもんやね、それが全国を統一しようとあちこちで戦ってるってとこやな。」

刀夜「…チツ…俺の行く先は常に戦いか……………」

小声で呟いた

美月「何か言った？」

刀夜「いや、何も。」

美月「まあええわ、とにかく刀夜さんは今どこも住むところがないし、金もない、そうやる？」

刀夜「……………ああ……………」

美月「とりあえずこの家に居てくれへん？もしかしたらなんとか三人でならなんとかなるかもしれへんから。」

風花「と言うかこの世界が何なのか全く分からず、飛ばされてきた時点で選択肢は無いんですけどね。」

刀夜「…頼む…」

美月「よっしゃー！じゃあまずは刀夜さんの服からやねー！」

刀夜「別にこれで良いだろ…」

風花「ダメですよー！そんな服だと目立っちゃいますから！」

刀夜「俺は気にしない。」

美月「刀夜さんが気にしなくても私らが気にするんや！此処で暮らすんやから、ちゃんと”此処”での、普通の格好してやー！」

刀夜「分かったよ…」

続く  
…

面倒だ  
…

第19話 面倒な事態が続けて起きると呆れる」…むしろイライラする」(後書

作者「まずはその現実をぶち殺す!!」

零夜「ついに現実逃避か…」

作者「一人1教科40点…基本をマスターすれば、赤点ギリギリでなんとかなるだろう。」

零夜「ガトリング両手に言うセリフじゃないよね!?確かに元ネタのセリフは両手にツインダブルガトリングガン装備してミサイル撃ちながら言ってたけど!!」

227

作者「…地獄への道連れは!!此処にあるテストと回答紙だけにしようぜ!!」

零夜「鎌振り回しながら言うなああああ!!確かに元ネタはやってたけどおおお!!」

まだ終わらんよー！！

第20話 まさかの出会いってのはたまにある事」…そりゃああるだろうな、

初めにはつきり言っておきます

この話はだいぶ前から書こうと思っていたのですが…

凄まじい事になりました…

読むときは後半を覚悟してくださいね

それでは

派手に行くぜ

第20話 まさかの出会いってのはたまにある事」…そりゃああるだろうな、世

はい、あれからだいたい2週間たちました勘だから多分だけどな

俺はとりあえずあのひし形の水色の宝石を調べている。

調べようにも機材は無いが、極夜でもある程度は分析出来るし、風花にも手伝ってもらってはいるものの、やはり詳しくは分からない。

刀夜「困ったな…」

風花「困りましたね…」

極夜『…困った…』

刀夜「これ…魔力の塊か…どうしたもんかねえ…」

風花「私達がここに来ちゃった理由は…多分知らない間にこれに衝撃を与えてしまって、不安定な状態の魔力が暴走してしまい、次元歪んだのが原因でしょうね…」

…俺…次元斬り裂けるんだけど…

極夜「しかも今コイツには魔力があまり入ってないからな…」

美月「…じゃあ…それに魔力を注いで、もう一度もとの不安定状態にして衝撃を与えたら…同じように次元が歪んで帰れたりは…せえへんか…」

刀夜「…いや…間違いではないかもしれん…俺が次元を斬ったときに周囲の空間が歪んで、そこにあったモノが斬れずに消滅したことがあった…それみたいなものだろう…あの頃は修行中で、コントロール出来てなかったからな…」

美月「今、物凄いヤバい事さらつと言ったよな！？次元を斬り裂くって聞こえたんやけど!？」

風花「しかも空間が歪んで消滅したとか言いませんでした！？それってかなりヤバいんですけど!？」

刀夜「まあ次元斬りなんか、できるのは俺を含めて三人しか居ないからな。空間斬りをするヤツも居るぞ。」

美月「あかん、これから先しばらくなに聞いても驚かれへん気がしてきた…」

刀夜「そうか。」

刀夜「とりあえず、これに魔力をひたすら注いでいくか。」

美月「じゃあ、まず私からやるわ。」

刀夜「分かった、だが3分の1くらいは自分に残しておけよ、なにがあるか分からないからな。」

美月「分かった。」

数分後

刀夜「おい、3分の1くらい残しておけと言ったはずだが。」

美月「え？まだ半分も行っていないけど？」

風花「美月ちゃんの魔力量は凄まじく多いですからねー！」

刀夜「……俺も多い方だが……これは多過ぎだな……ここまで魔力量が

多いやつは初めて見た……」

風花「私達は広域殲滅が得意ですからね、何回も何回もやって、魔力切れを何回も起こしてたらこんなになっちゃったんですよ。」

美月「……よし！だいたいこれくらいかな。」

刀夜「今度は俺だな。」

……あるえ？



刀夜「鞘はやめろ…鞘は…」

つーか勝手に極夜を使わんでくれ…

刀夜「いてて……」

極夜「大丈夫か？」

刀夜「まあな…追い出されちまったが…」

極夜「まあ彼女の機嫌が直るまで待つしかなかるう。」

刀夜「そうだな……ん……？なんか随分人が集まってんな……なんだ……？」

俺は行ってみることにした

刀夜「火縄銃？」

極夜『この世界の…銃だな。』

刀夜「随分面倒な仕組みだな…あんなに銃身が長かったら取り回しが悪いだろ…」

極夜『単発式でリロードにかなり時間がかかるのか…せめてもっと小さくしたらいいのに…』

刀夜「一挺買って、改造してみるか？」

極夜『好きにすればいい。』

刀夜「値段は…うおっ…高えな…」

こりゃ買うのは無理だな…

「すまん、この鉄砲をあるだけくれ。」

…はあ！？どんな金持ちだ！？

刀夜「……！」

本能的に分かった。

今…この銃を買おうとしている男は…ヤバイ…と…

見た目が全身鎧にマント、頭に兜はかぶっては居ないが、左手に抱えている

「ん？…なんだ？私の顔に何かついてるか？」

刀夜「…いえ…」

「…ふむ…心地よい殺気だ…」

刀夜「…！」

「貴様…なかなかの使い手と見た…」

刀夜「…買いかぶりすぎですよ…」

「ふっ…無理に隠さずともわかっておる…目を見れば一目で分かる…貴様の目は…幾たびも、修羅場をくぐり抜けた者がする眼……しかも質と量の次元が違う修羅場をくぐり抜けた筈だ…現に貴様も我を見て、同じような事を思ったであろう？」

刀夜「…はい…」

「…どうだ…少し、手合わせ願いたいのだがな。無論、死なないよ  
うにだが。」

刀夜「…ええ…構いません。」

「ならば、半刻程後に、街の外に来てくれ。」

刀夜「わかりました。」

「では、待っているぞ。あ、店主、鉄砲は後で部下が取りに来るか  
らその者に渡してくれ。」

刀夜「極夜…俺は…勝てるだろうか…。」

極夜『魔法が使えれば瞬殺できる……だが…魔法文化のないこの世  
界で魔法を使うのはマズい……純粋な剣術勝負なら……おそらく互角

…いや、ほんの僅かに向こうの方が上かもしねん。』

刀夜「ああ…鬪気をぶつけても全く動じないどころか、心地よいか言ってやがったからな。」

極夜『とりあえず、美月と風花には言っておけよ。』

刀夜「ああ。」

で、俺は先に家に帰った。

刀夜「ただいま。美月ー！風花ー！いるかー！」

美月「…なんや？」

刀夜「…まだ怒ってんのかよ…」

風花「どうしたんですか？」

刀夜「おう。今から街の外で決闘しゅうしてくる。」

美月「なんやて!?!」

刀夜「だから、俺の元の服に着替えに来た。その上から一応騎士甲冑こ…いや…見た目ただのコートだが…それで行くからな。」

美月「…私も行く。別にかまへんな?」

刀夜「ああ。」

刀夜「さて、行くか。」

行ってみると、見物人が何人も居た

「ほう、変わった格好だな。」

刀夜「貴方も人のこと言えないでしょうが…鉄板全身にくっつけてるし…」

「…否、これは西洋の甲冑だ。」

刀夜「…俺のも似たようなもんだ…」

「ふむ…そう言えば名のるのを忘れていたな、我は尾張、織田家当

主。織田信長だ。」

刀夜「…戦士<sup>ソルジャー</sup>…影宮刀夜…」

「刀夜か、覚えておこう。では…」

刀夜「いざ…」

「勝負ッ!!」

まずは…無拍子の一足飛びからの…抜刀術!

「クッ…!」

防がれたか…

「…つおおお!」

右薙に振りかぶってくる…ならば…！

刀夜「…ハアッ！」

柄尻で刀を受け止め、押し返しすぐさま納刀、抜刀術へと繋げる。

が

「鬼神！無双斬！」

マズい、と思つた瞬間、相手の抜刀術を抜刀術で迎え撃つた。

刀夜「ぐっ…！」

「うおおおおお！」

刀夜「負けるか…！」

ガキーン！

なんとか防ぎきった…

「ほう…鬼神無双斬を受け止めたか…」

刀夜「今の技…恐らく剣気を刀に纏わせ、鞘内部で剣気を圧縮、抜  
刀術で一気に解き放つ技だな…」

「その通り。武者たるもの、闘気を自在に操らねばならん。」

刀夜「なら…俺の闘気も見せてやる…行くぞ！」

足に闘気を纏わせるようにして、足の裏に闘気を集め

- - - - -轟ッ!! - - - - -

闘気を爆発させ、加速を最大限まで行う

勢いのまま、体を回転させ抜刀術を繰り出す！

刀夜「うおおおおお！！！」

「おおおおおおお！！！」

そして

- - - 一閃！ - - -

ガキーン！

防がれる…が…

「鞘！？」

刀夜「…抜刀術…二頭龍…！」

鞘から刀を半分ほど出したまま、攻撃

防がれた鞘から、刀を抜刀

そのまま

一閃！

「我の…負けだな…」

刀夜「大丈夫ですか…？」

「ああ、大事ない。峰打ちにしてくれたおかげだな。」

刀夜「死なないように、と言ったのは貴方でしょう…」

「まあ…そうだな…」

刀夜「ありがとうございます…」

「いや、こちらこそ勉強になった、まさかあのような抜刀術があるとは想像もできなかった…」

刀夜「いえ、こちらこそ、闘気を自在に操れば剣圧を強化出来るとは思いませんでしたから…」

「む…少しばかり時刻が不味いな…そろそろ行かねば、尾張に着くのが夜になってしまう。よし、このまますぐさま出発するとしよう。」

「

刀夜「部下はいいんですか？」

「いや、先に行かせてある。」

刀夜「そうですか、では…」

「つむい…いずれまた会おう！…さらば…！」

続  
く  
つ  
…

第20話 まさかの出会いってのはたまにある事」「…そりゃああるだろうな、世

作者「結局俺はなにがしたかったんだろうか」

零夜「まさかにも程があるな」

作者「でもこの話はだいぶ前から書くのは決まっていたんだよな。」

零夜「マジかよ」

作者「マジだよ」

零夜「なんで織田信長なんだ？」

作者「俺が最も尊敬する偉人だから。」

零夜「絡み方がかなり強引だな。」

作者「いや、でも織田信長は実際に大阪の堺で鉄砲に興味をもって、後の戦いに使っていくようになったんだぞ。」

刀夜「じゃあ何故戦わせたし。」

作者「格好良さそうだったからという俺の妄想120%」

刀夜「ヲイ」

続けなければ、生き残れない！

第21話 ヘルカよ！私は帰ってきた！！」「…核は撃つなよ？」「(前書き)

またサブタイがネタ

ヒントは作者も憧れるソロモンの悪夢

今回はただ帰るだけ

派手に行くぜ

第21話 ヘルカよ！私は帰ってきた！！」…核は撃つなよ？」

刀夜「ハア…もう2ヶ月か…美月…魔力はまだたまってないか？」

美月「あと…ちょっと…」

刀夜「ホントかよ…」

風花「んー…確かに後少しだと思いますよ、計測不能領域にもうすぐ達しますし。」

刀夜「そうか。」

美月「む…なんで私の事信じへんのに風花の事は信じんの？」

刀夜「お前は見栄張って、ホラ吹く時があるからな。」

この前なんざ作り方をまとも知らない料理を作って俺がえらい目にあつたからな。

刀夜「……どうも俺は上手く魔力感知が出来んな……」

そう、俺は魔力の感知が苦手なのだ。

そこに有るか無いかなどは分かるのだが、多いのか、少ないのかなど、細かい事が分からない。

刀夜「何とかしなきゃな…」

美月「ふう…今日はこれくらいにしとこか。」

風花「お疲れ様です、美月ちゃん。」

美月「ありがとう、風花。」

刀夜「…それに…影の魔力コントロールを何とかしなきゃな…」

美月「…刀夜さんは何をぶつぶつ言ってるんや…」

風花「朝からずっとアレですからね…ちょっと不安です…」

刀夜「ま、考えても仕方ないか…」

美月「何をぶつぶつ言ってるんや。」

刀夜「気にするな、大したことじゃない。」

刀夜「さて…腹が減ってきたな…」

美月「じゃ、何か作るか。」

刀夜「ああ、」

俺は立ち上がり、二歩進んだ瞬間

カチャ

刀夜「あ？」

あの宝石を踏んでいた

刀夜「あ」

美月「あ」

風花「あ」

刀夜「うおおお！？」

美月「きゃあああ！！」

風花「うわあああ！！」

以前と同じように光に包まれ…

この世界から俺達は消えていた

刀夜「うおおおおおおおおお!!?!?!?!」

ゴシヤアアア!!

刀夜「うおおお!!」

バキッ!バゴツ!

美月「あいたたたた…」

風花「美月ちゃん、大丈夫ですか?」

美月「私は大丈夫やけど…アレ？刀夜さんは？」

刀夜「…お…降りてくれ…」

美月「ご、ごめんなさい！すぐどこから！」

刀夜「いててて…」

風花「ここは…どこですかね？」

刀夜「…ベルカだよ。」

美月「なんでわかるん？」

刀夜「あの馬鹿でかい城を見る…あれは…たしか覇王国の物だったはずだ…」

美月「そう言えばそうやったなあ…」

刀夜「ちょっと行ってみるか。」

続  
く

第21話 ヘルカよ！私は帰ってきた！！」…核は撃つなよ？」（後書き）

作者「やっと明日でテストが終わるぜ…」

零夜「ずっと小説書いてたから勉強してないだろお前。」

作者「ああ。それがなにか？」

零夜「赤点取ったらえらい目に遭うぞ。」

作者「まあ数学と理科は訳分からんからな、多分無理。英語と現代社会はまあまあ、問題は世界史をまともに覚えずにテスト受けたがらボロボロなんだよなwwwあと明日の古文と数Aもヤバい。」

零夜「勉強しろよ！！」

作者「期末で頑張る。大丈夫だ、問題ない。」

零夜「とか言っただけ同じ過ちを繰り返すフラグだよな。それ。」

作者「過ちは繰り返させない！！」

零夜「お前が繰り返すんだよ！！」

続ける！それが人の夢！人の業！

第22話 一線をこえた厨二病は凄く格好いい」…厨二病患者が言ったらなんか

厨二病全開な話

後、この小説が15000アクセスを突破しました

派手に行くぜ

第22話 一線をこえた厨二病は凄く格好いい…厨二病患者が言ったらなんか

刀夜「なんか…さびれてんな…何があつたんだ？」

美月「此处に来たことあるん？」

刀夜「一度だけ旅の途中に物資補給のために立ち寄ったことがある。

」

美月「その頃は、もっと人がいたんか？」

刀夜「ああ、もっと活気があつた。」

風花「今は誰もいませんねえ…」

刀夜「おかしい。」

美月「え？」

刀夜「…クラウドはどこだ…！美月！城に行くぞ…！」

言い切る前に俺は駆けだしていた

美月「あ、ちょっと!!まってや!!」

刀夜「ハア…ハア…ハア…クラウド!いるか!？」

チツ…まさか…!

美月「ちょお…まってや…」

風花「つ…疲れたです…」

刀夜「…クラウド…オリヴィエ…」

「刀夜さん!？」

刀夜「クラウドか！？無事だったか！」

クラウド「すみませんが、再会を喜んでいる暇がありません！今から橋を下ろしますので、こちらまで来ていただけませんか！？」

刀夜「わかった！だが橋は下ろさなくていい！跳んでいく！美月、風花、すまん。」

美月「え、ちょっときやあ！？」

風花「うひゃあっ！？」

俺は二人を抱き抱え、堀と城門を飛び越えた

刀夜「すまん、美月、風花。」

美月「びっくりした…」

風花「びっくりしたですう…」

刀夜「クラウド、なにがあった…あれからどれくらいたった…オリ  
ヴィエは無事なのか？」

クラウド「あれからって…もう二年はたってますよ？あとオリヴィ  
エは無事ですよ…」

刀夜「チツ…やはりあっちとこっちで時間の進み方が違うか…」

クラウド「あっち？」

刀夜「ああ、あのすぐ後…どこか分からないが、別の世界に飛ばさ  
れていてな…俺にとってはまだあれから2ヶ月程しかたってない…  
そんなことより、何があったんだ…」

クラウド「魔王…と言えば分かりますか？」

刀夜「チツ…あそこか…」

美月「魔王って…まさかあの…ロード・デイスベアー絶望を統べる王とかエンドレス・デイスベアー永久の絶望だと  
言われてるあの…？」

クラウド「そう、その魔王が…ついに此処まで来た…」

刀夜「ツチ…昔…火彩と二人でボコボコにしてやったんだが…  
またバカで厨二病臭い野望を抱きだしたか…あのヒゲ…あんなやつ  
でも一応かなり強いからな…」

俺はつぶやいた

クラウド「魔王と戦ったのですか!？」

刀夜「ああ…だいぶ昔な…もう7年ぐらい前だ…あの時は火彩…俺  
の親友と二人でボコボコにしてやったんだが…あのヒゲ…言ってる  
ことアホな割にはなかなか強いからな…」

クラウド「一応…周辺の国々に協力を呼びかけたのですが…」

刀夜「ああ…それと、龍神傭兵団を雇うといい…アイツらなら余裕  
で魔王軍を潰せるだろう。連絡するときは俺は名前を使ってくれて  
かまわない。あと俺からの伝言で（火彩を寄越してくれ）と団長に  
伝えてくれ。俺はオリヴィエの所に行ってみる。」

クラウド「分かりました、龍神傭兵団を…」

「相変わらず、魔力感知が出来てないな、刀夜。」

刀夜「…！…！…！火彩！？」

火彩「久しぶりだな、四年ぶりくらいか？」

刀夜「何で此処にいるんだ。」

火彩「お前の真似を龍神傭兵団全員でやろうと言ったことになつてな、今はみんなこつちに向かつてるさ。ま、団長とメンバーの半分は、お前の心配する聖王国に向かつてるがな。」

クラウド「じゃ、じゃあ…貴方が…魔王を一度倒したという…もう一人の…」

火彩「ああ、俺がスカイライト・ブレイズ蒼天の焰こと、闇咲火彩だ。」

刀夜「これは…行けるぞ…！クラウド！この戦力なら逆に攻めても勝てるぞ…！」

クラウド「ええええええ…！！！」

美月「ちよつとまったあ…！！！」

風花「私達を忘れ無いでほしいです!!」

美月「相手の魔王軍は数はハンパなく多いはずや!!」

風花「だから、私達の出番です!!」

美月「超広域殲滅魔法で魔王軍みんなぶっ飛ばしたるわ!」

火彩「おい、刀夜。誰だ?この嬢ちゃんは。」

刀夜「飛ばされてた世界で俺を助けてくれた人とユニゾンデバイス。」

火彩「そうか。よく似合ってるぞ。」

刀夜「なんの話だ?」

火彩「気にするな。」

刀夜「…意味分からん…」

クラウド「さ…さすがに今すぐは無理なので…3日後でよろしいですかね?」

火彩「ああ、直ぐつてのは無理なのは分かってる。今の内に、聖王  
国に連絡して、団長にも伝えておくよ。」

クラウド「ありがとうございます……」

続く

第22話 一線をこえた厨二病は凄く格好いい」…厨二病患者が言ったらなんか

作者「H A H A H A H A H A 今日でテスト終わるぜ」

零夜「勉強しないなら寝ろよ!」

作者「昼寝したから眠れない夜」

零夜「じゃあ勉強しろ!」

作者「やーだね そんな事するくらいならミリオンスタップをマスタ―するね。」

零夜「作者…テンションおかしくないか?」

作者「あははははは、深夜だからって発狂はしてないぜ――

――と!――!」

零夜「十分発狂してんじゃねえか…よし、斬ろう。八刀一閃!」

シャキーン！

??1「You must die! stinger!」

??2「Illusion blade!」

作者「ぎゃあああ!」

零夜「あ、蒼と紅の二人の死神に作者が…」

この後書きを続ける…それが俺の使命だ!

ようするにまだまだ続く…

第23話 メタ発言と死亡フラグ建設はほどほどに「いや、無しにしてるよ！」

何故こうなったし

普通の話を書いたのに何故かギャグに…

ともかく

派手に行くぜ

第23話 メタ発言と死亡フラグ建設はほどほどに「いや、無しにしてるよ!」

クラウド「そうだ、刀夜さん。」

刀夜「ん?」

クラウド「断空拳、完成したので見ていただけませんか?」

刀夜「おお、あれを完全にしたか。」

クラウド「はい!」

刀夜「いいだろう、見せてみる!」

〳〳移動中〳〳

刀夜「さあ…来い！」

クラウド「行きますよ！霸王！断！空！拳！」

速い！避けれるか！？

クラウド「はあああああああ！…！」

避けれない…！防ぎきれるか！？

刀夜「だあああああああああああああ！…！！…！！…！！」

バゴオオオオオオオオオオオオオオン！！…！！…！！

この一撃で俺は城外まで吹き飛ばされたよさ

クラウド「ホントーーーーーにすみませんでしたアアアアア  
ア!!!」

刀夜「いや…気にするな…問題ない…良い一撃だった…ゴフッ！」

クラウド「血吐いてますけど!？」



続く



作者「そつだ、実は零夜がある方の小説の後書きに登場してるんだ！」

刀夜「マジか。」

作者「あしゆきさんの 俺が秀吉で化け物級 と言う小説だ！内容はバカテス、主人公は秀吉の小説です！」

刀夜「よろしければそちらも見に行つてあげてください！」

作者「あしゆきさん！ありがとうございまアアアアアす！！！」

え？まだ続くの？

第24話 気持ちはまず言葉にしてから伝える「言葉にしなきゃわからないも

今回は…ちょっと意外な話かも

派手に行くぜ

第24話 気持ちはまず言葉にしてから伝える「言葉にしなきゃわからないもん

刀夜「うおっ!?!」

俺は目を覚ました……

刀夜「何故俺は寝ていたんだ……? クラウスの霸王断空拳で吹っ飛んで……どうしたんだっけ……」

美月「その後に火彩さんにドロップキック食らってばたんきゅーや」

284

刀夜「美月……」

美月「もお……心配したんやで……なかなか目覚まさへんし。」

刀夜「ああ……悪かった……あれからどれくらいたった?」

美月「2日。」

刀夜「…って今日出発じゃないか！」

美月「あー、それ来週になったから。聖王様が一緒に来るとかで延期になったんよ。」

刀夜「オリヴィエが…。」

美月「しっかし…随分ベルカの王様と仲ええなあ。」

刀夜「クラウドとオリヴィエだけだ…。」

刀夜「ふう…まだ体が痛むな…。」

美月「一応治癒魔法は掛けといたんやけどなあ…。」

刀夜「まあ、一日あれば治るさ。」

カチャ…

部屋の扉が開いて、銀髪の長い髪の女性が入ってきて

風花「美月ちゃん！ただいまですう！！」

美月「おかえり、風花。」

………え？

刀夜「風花…？」

いや、おかしい。

風花は確か俺の手のひらサイズだったはず。だが今日の前で風花と言う女性は完全に美月より身長が高い、しかもスタイルが抜群だ。いや待て風花はもっと可愛い感じだったはずだ。今日の前で風花と言う女性はどつちかと言うと綺麗と言う言葉が似合うような感じ。だがあの口調は完全に風花のものつまりこの人は…

以上、思考終了まで0・2秒。

風花「…刀夜さーん、今何か私の見た目について0・2秒ほど思考  
しませんでしたかー？」

刀夜「あいや、別にそんな事はないぞ！ただ、綺麗だと思っただけ  
だ。」

風花「そんな…綺麗だなんて／＼／＼／＼／＼／＼」

美月「…むっ…」

刀夜「いてててててっ！！なにしゃがる美月！！」

美月「むー……」

美月よ、何故俺を睨みつける

風花「ふふっ 美月ちゃんは刀夜さんの事がすく「あわわわわわっ  
！そ、そうや！風花！頼んでたもの！もってきてくれたか！？」む  
う…まあ持ってきてましたが…」

刀夜「…シッ……騒ぐな…」

カチヤ…

俺はドアを開けた

火彩「うおっ！？」

オリヴィエ「キャアッ！？」

クラウド「うわっ！？」

団長「おわっ！？」

刀夜「……何やってんだ、アンタ等は……」

火彩「いや、美月ちゃんが刀夜に告げ「黙れ！火彩！」

ゴシヤアアアア……！！

火彩「あぐべらあああああああ！！な、何すんですか団長オオ！！」

団長「何も言うな、火彩。」

火彩「いや、だけど刀夜は「何も言うな！！」 Yes

Sir!!」

オリヴィエ「あ……あの……クラウド……！！！！！！こ、こんな所で……！！！！！！（あ、でもあんまり悪い気は……！！！！！！）」

クラウド「すすすすすすすす、すみません！すぐ退きます！！！！！！！！」

ドアが開いて転けた時、クラウドがオリヴィエを押し倒してしまっていたようだww

風花「ハイそこ！ラブコメ展開しないでください！！！」

団長「じゃ、刀夜！！頑張れよ！！！」

そう言って団長達は立ち去って行った

……何を頑張れと？

刀夜「何だったんだ…？」

美月「…あ、あの！」

刀夜「ん？」

美月「刀夜さんは…その…す、す、す、好きな人とかは…い、いるんですか？／／／／／／／／／／」

刀夜「いや、居ないが？」

コイツ…どうしたんだ？急に…

美月「…私…私は…と、刀夜さんの事が…す、す、す、す…好きで  
す!！」

刀夜「……え?」

美月「…。」

刀夜「そりゃ、どーという意味d…むぐっ!?!」

言いきる前に、美月に何か柔らかいモノで口を塞がれた

美月の顔が近い…

そう

俺は美月に

キスされていた。

美月「これでまだどういう意味が分からんか？／／／／／／／／／／／／／／／／」

刀夜「いや……」

美月「……で、返事は……？」

刀夜「分かった……俺は……お前の気持ちに答えよう。」

美月「それって……つまり……」

刀夜「okだ。」

美月「……や……やったああああ！！！！」

刀夜「うおおお！？」

美月は俺に抱きついてきた

その勢いで俺と美月はベッドから落下した

美月「えへへ」

美月は俺に抱きついたまま、頬ずりしてくる。

俺は思った

美月は必ず守り抜いてみせる…と…

続く…

第24話 気持ちはまず言葉にしてから伝える「言葉にしなきゃわからないもん

作者「ゴブガガゲエエエエエエエエエエ!!!」

零夜「作者が砂糖を吐いた!？」

作者「ま、この程度ではあまり吐かないがな。」

零夜「いきなり砂糖を大量に吐くなんざ怖過ぎるわ!」

作者「この程度で大量だったら流星とか俺、書きながら凄まじいことになってるぞ!」

零夜「病院行け!」

続いたり、続かなかったり、続いたり

第25話 派手にぶちかませ！」「景気よくな！」「(前書き)

今回は美月と風花のターン!!

派手にいくぜ!

第25話 派手にぶちかませ！「景気よくな！」

あれから一週間

魔王軍をぶっ飛ばしに行く日だ

火彩「細かい作戦は、どうする？」

刀夜「美月と風花の超広域殲滅攻撃でぶっ飛ばしまくった後、龍神傭兵団を先頭に全員突撃！！暴れまわる！！美月はぶっ飛ばした後、すぐ戻る！以上！」

火彩「良いねえ！シンプルで覚えやすい！かつ、上手いこと行きそ  
うな最高の作戦だ！」

団長「バカでも理解可能だな。さすが刀夜だ。」

極夜「ただ単にめんどくさいから細かいとこまで考えてないだけじ  
ゃ…」

白夜『極夜ア…ソレを言っちゃア…おしまいだぜエ…』

〔転送移動中〕

刀夜「来たぞ…!!じゃあ…美月、頼んだぞ…」

美月「任せといて!風花!行くで!!!」

風花「はいです!!!」

美月「ユニゾン!!!」

「インツツ!!!」

髪は長い銀髪、黒と白の服…騎士甲冑に身を包み、黒い帽子を被った美月がそこには居た

美月「じゃあ、行ってくるわ、刀夜。」

刀夜「ああ…気を付けてな…」

背中に四枚の翼を出し、羽ばたいて行く美月。

美月「さあ！派手にぶちかましたるで！！出し惜しみ無しや！！」

風花「はいです！！」

美月「崩壊の音色よ、全てを消し去る闇となり、破壊せよ！ラグナ  
ロク・エミツション！！」

いきなり超強力広域殲滅魔法でその名の通り、崩壊を拡散させる。

美月「まだまだや！風よ！切り裂く刃となりて吹き荒れる！プラス  
ト・オブ・ウインド！！」

強烈な風があたりに吹き荒れ、風が全てを切り裂く

風花「美月ちゃん、まだいけますか!？」

美月「余裕や!後5発は軽いで!さあ!次や!炎よ!焼き尽くす紅蓮の焰ハヒ!!インフェルノ・ブレイズ!」

全てを焼き尽くし、消し去る炎が飲み込む

風花「美月ちゃん!右68度方向に敵が集結しています!」

美月「わかった!黒金よ!裁きを下す鉄槌となれ!クラック・ダウン!  
ン!」

高圧縮された魔力弾が鉄槌により打ち出される鉄球のごとく降り注ぐ

美月「ハア…ハア…ハア…ハア…さすがに…ちょお…しんどいな…」

風花「大丈夫ですか!？」

美月「ちょっと…飛ばしすぎた…かな…」

風花「無理しないでくださいよ?はッ!後ろから攻撃です!」

美月「大丈夫や。鋼よ！悪を拒絶する盾となれ！シールド・オブ・ステイール！！」

鋼の障壁が魔力弾や砲撃を完全に防ぐ

美月「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…これが…最後やな…響け！  
終焉の笛！ラグナロクッ！」

白銀の集束砲が全て打ち砕く

美月「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…」

風花「大丈夫ですか？」

美月「ちょお…きついな…でも…後は刀夜と火彩さんに任せようか。」

風花「はいです！」

美月と風花は戻って行った…

続く…



第26話 さあ！partyの始まりだ！」「派手に行くぜ！」「（前書き）

今回派手に技を決めるぜ！

派手に行くぜ

第26話 さあ！partyの始まりだ！」「派手に行くぜ！」

刀夜「美月！」

美月「あはは…ちょっと無理すぎた」

刀夜「ありがとう…ゆっくりしてくれ。」

美月「うん…」

刀夜「さて…全員行くぞオ！……！」

「……………オオ……………ツ……………」

さあて！派手に暴れるかア！

火彩「おらおらおらア！！ザコはどきやがれエえ！！」

「火彩さん！刀夜さん！あまり魔力を使いすぎないでください！ザコは俺たちが始末します！」



戦場を駆け抜け、道を切り開いて行く

正面を蹴り飛ばし、背後は殴り、上は投げ飛ばし、斬り、殴り、撃ち、

斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る  
斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る  
斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る

殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る  
殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る  
殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る

撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ  
撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ  
撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ撃つ

単純な作業の繰り返しだが、敵に恐怖心を与え、味方の志気は倍以上に跳ね上がる

圧倒的に数が少ないはずの龍神傭兵団と霸王、聖王の軍が圧倒的物量、圧倒的戦闘力を誇る魔王軍を蹂躙していく。

刀夜「面倒だ！一気に行くぞ、火彩！」

火彩「分かったア！」

刀夜「極夜！カートリッジロード！！」

極夜「了解！」

火彩「白夜！カートリッジロード！」

白夜「了解だア！」

刀夜「斬り裂け！黒雷龍！雷龍らいりゅう霸斬はざん！！」

漆黒の雷を刀に纏い、帯電した刀を振り下ろす

火彩「焼き尽くせ！！蒼炎龍！！炎龍えんりゅう霸斬はざん！！」

蒼い焔を刀に纏い、蒼炎の刀を振り下ろす

黒雷が斬撃と衝撃波と共に、発生

黒雷が全てを打ち砕きながら、切り裂き、吹き飛ばす。

蒼炎と斬撃、衝撃波が発生

蒼炎が全てを焼き尽くし、切り裂き、吹き飛ばす

無論、しんぼう不殺だ

火彩「見えたぞ!!」

刀夜「今度こそ、あのオッサンを…殺す…!!」

続く

第26話 さあ！partyの始まりだ！」「派手に行くぜ！」「（後書き）

作者「今回は短いが…次回は！」

零夜「戦いか！なら長いな。」

作者「とは限らない。」

零夜「はあ！？」

作者「この過去回想編は…おっと…これ以上は…な？」

続きまくる

第27話 守る物があるヤツは何処までも強くなる」…ああ…」（前書き）

今回はフザケ無し

…派手に行くぜ…

第27話 守る物があるヤツは何処までも強くなる」……ああ……」

刀夜「っらあ!!」

バゴオオオオン!!

扉をブツ飛ばし、厨二病全開な城に侵入する

火彩「出て来やがれ!!オッサン!!」

「オッサン言うな!!私はまだ38だ!!」

何処からともなく、声が聞こえてくる

火彩「十分オッサンだ!!」

「黙れ!お前達もいつかはそうなるんだよ!!」

火彩「38になってまだ厨二病全開なお前みたいにはならねえよ!!」

刀夜「……グダグダ言っていないで出て来たらどうだ!!」

「ハッ！気付けよ、始めから此処に居るぜ？」

火彩「ハイ隙ありイイ！」

背後から声が聞こえた瞬間火彩は回転しながら突き刺した。

が

「残念！ハズレだ！」

上から蹴られる

火彩「ガハッ！」

刀夜「火彩！クソッ！」

「ははは！お前らも強くなってるだろうけどな……」

ヤツの姿が、変わっていく

人ではない異形の姿

そう



はやて」「ここで終わり？」

零夜「いや、どう言うわけかここで記憶が一度途切れてるんだ……この次が、魔王と戦って…魔王の死ぬ瞬間だ…」

.....

刀夜「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ゴホツ…！」

火彩「ゲツ…」

団長「ハア…グハツ…」

「フツ…やはり…か…」

刀夜「何を…ゼエ…言っ…ゴホツ！いる…」

「…これこそが…私の…望んだ…結末だ…私が死に…抑止力は失われ…世界は…さらなる戦いへと…導かれる…そして…その戦いを…終わらせてこそ…真の平和が訪れる…願わくば…その戦いを終わらせるのは…刀夜…お前達で…あつ…て…ほしい…もの…だ…ガハツ…！」

刀夜「…最初から、それが目的だったのか…？」

「初めは…ただ戦いを止めて世界を平和にしたい…そう願って…戦っていた…だが…力をつけ…強くなり過ぎた…するとどうだ…何処の国も…こちらから行かなければ…誰も戦わない、だが他の所とは戦う…通り道に我々がいれば…諦める…こんな抑止力があっては…」

永遠に平和は訪れん…だから私が死に…この国が無くなることで…  
世界に平和は訪れる…そう考えた…」

刀夜「だか…本当にそうなるとは限らないだろう…」

「いや、必ずなるさ…少なくとも、私が死ぬことで、世界は変わる…人は…変革していかなければならない…変われなかった者達の…代わりに…変わっていかなければ…ならないのだ…変わることで…人は…世界は前に進んで行く…」

火彩「ああ…？つまりお前は始めから死ぬつもりだったのか？」

「そう言う…事になるな…」

刀夜「だったら…今此処で…俺が…とどめを刺す…」

「…その前に…これを…お前達三人に…渡したい…」

刀夜「なんだ…この光球は…」

「悪魔の力さ…私の体に宿りし悪魔の…力の最も強い力を込めたものだ…受け取れ…」

光が俺と火彩、団長の元へ飛んでいき、

刀夜「うおっ…」

火彩「うっ…」

団長「ハア…」

光球が体の中に入った

さあ…

刀夜「サヨナラだ…クソ親父…」

「サヨナラだ…我が息子よ…」

-  
-  
-  
-  
斬ッ!!  
-  
-  
-

刀夜「……。」

俺は…城の外で一人たたずんでいた

火彩「…泣いてるのか…？」

刀夜「…いや…雨だよ…」

火彩「…雨なんざ降って無いが…？」

刀夜「俺は…悪魔だ…悪魔は泣かないもんさ…」

火彩「…そうか…けどな…家族のために…仲間のために…恋人のために涙を流せる悪魔も居るんだろうな…」

刀夜「…さあな。」

火彩「ところで…」

B a n g ! B a n g !

突然銃を発砲した火彩

弾は現れた兵士に直撃した

火彩「残党か何かしんねえけど、やったら兵士が現れてるぜ？まあ全員ぶっ飛ばしてやるけどな。」

刀夜「……ざつと……1000000か……お前も無茶するよなあ……火  
彩……まあ美月と風花、オリヴィエやクラウスの所へ行かせないため  
にここで全員ぶつ飛ばすか……そう言えばあの子達は……？」

火彩「刀夜……お前もだろう……上手いこと団長が逃がしてくれてるさ  
……ま、美月ちゃんが付いてるんだ、大丈夫さ。」

刀夜「そうだな……さて、早速この悪魔の力とやらを試すかな……」

火彩「ああ！」

刀夜「じゃあ……そろそろ行くか……！」

火彩「……ああ……！」

行く前に、刀を掲げ、俺は言う

刀夜「夢を抱け……」

火彩「ソルジャー兵士……いや、ソルジャー戦士の誇りは……！」

火彩が続ける

「絶対に忘れるな!!」

刀を振るい、二人同時に叫ぶ!!

シャキン!

「いらっしやいませええええええええ!!!!!!!!!!」

俺と火彩は戦った

目の前の敵を全て駆逐するため…

生きて帰るため…

無意識に刀を振るい続けた

撃たれても、刺されても、斬られても、殴られようとも

ただただ、戦い続けた。

気が付けは、周りには誰もおらず俺は倒れていた。

火彩「よお…刀夜…生きてるか…？」

火彩が地面を這って近寄ってくる。

刀夜「ああ…まだ…なんとかかな…だが…もう無理っぽいかな…」

火彩「俺もだ…へへ…俺達…1000人斬りどころか、100000  
00人斬り達成しちゃったぜ…」

刀夜「ああ……火彩……雨……降ってきたな……」

火彩「ああ……」

刀夜「……あの子達は……もう……行ったか……」

火彩「ああ……けど……彼女がついてるんだ……心配ない……団長もいるし  
な……」

火彩「俺……ちょっと眠いな……少し眠らさせてもらっわ……」

刀夜「俺も……もう眠いや……」

火彩「なあ……刀夜……俺達……英雄に……なれたかな……」

刀夜「ああ…きつと…な…」

火彩「へへ…じゃあ…お休み…」

刀夜「…美月…すまない…後で…迎えに来てくれ…俺は…ちょっと眠ってるからさ…じゃあ…な…」

そして

死んだ

俺…影宮刀夜  
と  
アイツ…闇咲火彩  
は…

…  
続く

第27話 守る物があるヤツは何処までも強くなる」…ああ…」（後書き）

作者「…今回は…俺一人でやらさせていただきませぬ…」

今回の話…いや、この過去回想編で言いたかったのは

繰り返される悲劇は、必ず終わりを告げる時が来る

と言ったこと

そして最も言いたかったのは

魂は受け継がれ、必ず還ってくる

と語りつづけます。

では…続く…

第28話 夢を持って」…。」「(前書き)

さて…今回も…まじめに…

派手に行くぜ

## 第28話 夢を持って」。。」

零夜「…とまあ…こついう訳だ…うおっ…!」

うつむいていたから気付かなかったが、話が終わって顔を上げて驚いた

全員が、涙を流していたのだから…

零夜「…あー…朝からする話じゃなかったな…」

はやて「零夜君の…アホ…そんな…辛い事なんですつと一人で抱え込んでたんや!」

零夜「昨日…火彩と出会って思い出したんだ…俺は…一度死んで…生き返らされたからな…いや…体は違うけど…記憶と心と…魂をな…俺を生き返らせたのは、時空管理局の…最上層部…伝説の戦士ソルジャーと呼ばれたらしい俺を生き返らせることで戦力としようとしたのだから…まあ…火彩は早くに記憶を取り戻し、すぐ逃げたらしいけど…俺は何も覚えてなくて…父さんと母さん…ああ、刀夜の方じゃなく

て、零夜の方の…両親に助けられた…で今に至るわけだ…つまり、  
”影宮零夜”の体に”刀夜”の細胞と魂を入れたのが俺だ…だけど  
…俺はもう影宮刀夜じゃない…俺は影宮零夜だ…」

はやて「でもッ…悲しすぎるやんか！そんなんツ…！」

零夜「はやて…俺達は…生まれてくる時代を選ぶ事はできない…けど…どう生きるかは…自分で決められるんだ…だから…俺は魂に従って生きた…だから…俺は自分の人生を後悔はしていないよ…それに、今ならばはやて達が居るから…家族が居るから…そして…夢があるから…」

零夜「今更言っけど…もう12時…」

「「「「「あ「「「「「

ってことは俺……4時間ぶっ通しで喋りっぱなしだったというのか

どつりで喉が痛いわけだ。

零夜「の……喉が……」

- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -

零夜「…何故こうなったし…」

現在、俺はソファに座りながら、はやてとヴィータに左右から抱きつかれている

零夜「何故こうなったし。」

極夜『諦めた方がよろしいかと。』

どうしても良いが、右がはやてで左がヴィータだ

零夜「（ザフィーラ…ヘルプミー…）」

俺はこっそりと念話を送る

ザフィーラ「…無茶を言わんでくれ…シグナムとシャマルが買い物から帰ってくるまで耐えきるんだ…」

孤立無援かよ…

零夜「…二人とも…離れては…くれないよな…」

「あたりまえだよ」

……もう一度言っ…何故こつなったし。

はやて「なあ、零夜君」

零夜「ん？」

はやて「今の零夜君の夢って…何？」

零夜「俺の夢は…戦士<sup>ソルジャー</sup>として、もっとたくさんの人役に立つこと…それと…この平和を…はやて達を守り抜くことかな…俺の命尽きるまで…な…」

はやて「ふーん…じゃあ、ヴィータは？」

ヴィータ「あたし？うーん…はやてやアニキ達とずっと静かに暮らしていくこと…かな。」

零夜「はやての夢は？」

はやて「うーん…今は…やっぱりみんなと一緒にいることかな…後…ちゃんと自分の足で歩きたい…かな。」

零夜「…夢を持って…何かを成し遂げたいなら、夢を持つんだ…」

はやて「え？」

零夜「俺が…刀夜が昔火彩に言った言葉だ…夢を…なにか目標があるヤツはそれに向かって全力を出せる。だから夢を持つヤツは強いんだ。アイツは…火彩は英雄になることを夢にしていたから…強くなれた…」

はやて「じゃあ、零夜君の昔の夢って何やったん？」

零夜「…さあな…覚えてない…いや…最初は無かったのかもしれないな…<sup>ソルジャー</sup>戦士になってからはたくさん人の役に立つこと…だったけど。」

ヴィータ「いつてることとやってることが矛盾してるじゃねえか！」

零夜「…今考えたら、おかしなモノだよな…けど、気付けてよかったと思う。」

はやて「なあ、もっと…話を聞かせてくれる？」

零夜「ああ…いいとも…」

「……………」

火彩「さて…こんなもんかな…俺の話は…な。」

零夜と同じように火彩もフェイトに自身と知りうる限りの刀夜の話聞かせていた

続  
く  
…

第28話 夢を持って」…。」（後書き）

では、次回はもっと細かい話などを…

## キャラ紹介とかとかと（前書き）

これまでの設定とあらすじまとめ

ネタバレ注意

## キャラ紹介とかとかとか

主人公

かげみやれい  
影宮零夜

年齢：9歳

髪色：黒

魔力光色：漆黒

魔力変換資質：黒雷、影

備考

何百年も前、古代ベルカを中心に活動していた戦士ソルジャー

もともとは龍神傭兵団と言う傭兵団に所属していた

その頃の名前は影宮刀夜かげみやとつや

魔王と呼ばれたベルカの王の息子にして悪魔の力を受け継いだ刀夜の血と記憶と魂と細胞を受け継いだ存在

傭兵、刀夜時代は戦いばかりで自身を見失いかけていたが、傭兵をやめ、戦士ソルジャーとなることで自分の夢を再び見つけ、世界中を旅し続けた

旅の途中で聖王オリヴィエ・ゼーゲブレヒトと霸王クラウド・G・S・イングールドと出会い少しばかりともに行動した

その後、地球、日本の戦国時代に何らかのロストロギアによって飛ばされる

そこで美月と風花と出会う

そこでたまたま出会った織田信長と出会い少し戦う

その戦いで、闘気を自由自在に操ることを学んだ

そしてしばらく暮した後、再びベルカへと帰る

その後、オリヴィエとクラウドと再会し、魔王に攻められかけていると知り再会した親友、火彩と龍神傭兵団のメンバーとも再会、魔王軍を逆に攻め、魔王と刀夜、火彩、団長とともに魔王を破り、魔王と呼ばれた王が自身の父と知る

魔王自身が体に宿した平行世界の別次元の悪魔の力を受け継ぎ、その直後におよそ1000000以上の魔王軍の残党と火彩とともに美月やオリヴィエ、クラウドを守るため戦い、その戦いにおいて死

亡した

そして、管理局の最上層部によって伝説の戦士ソルジャーと言われた自身と親友の火彩を戦力とするためとともによみがえらされた

その後、“零夜”としての両親に助けられ、現在に至る

後、個人的にはCVは風間勇刀さんだと思っている

デバイス：極夜

もともとは一つのデバイスだった極夜をかつての持ち主が3つの変化機能を

分解し、それぞれ個別のデバイスとして受け継がれていた

刀夜としての記憶を取り戻した零夜があるべき姿に戻したことで、元の力と人格を取り戻した

あと、作者的には 極夜のCVは置鮎龍太郎さんだと思っている

モード1

日本刀

黒い鞘に黒い刀身の刀

モード2

大剣

黒ずんだ銀色の刀身の両刃の大剣

わかりやすく言うなら Devil may cryの主人公ダンテのDMC1の剣、フォースエッジを長くしたもの

長さは170cm程

モード3

長刀

漆黒の刀身の2m以上の長刀

攻撃力と攻撃範囲の長さに特化

ただし重いので攻撃速度は落ちる

それでも十分速いのだが

モード4-1

2挺銃

コルトM1911ガバメントがデザインのモデルに改造を施し、大型化

連射性と誘導性と魔力圧縮など、複雑な作業に優れている

モード4 - 2

ツインバスターライフル

速い話がウイングゼロカスタムのツインバスターライフル

魔力集束と砲撃と殲滅など、破壊に優れている

親友

やみさきひいろ  
闇咲火彩

年齢：9歳

髪色：ブラウン

魔力光色：蒼

魔力変換資質：蒼炎、光

備考

龍神傭兵団のエース

刀夜が去った後、刀夜の言った言葉に習い、戦いを変えた傭兵団において最強を誇った

刀夜より先にクラウドのもとに行き、魔王軍の出現にひそかに準備を進めていた

そして刀夜と再会し魔王と戦い、その後約1000000人の魔王軍残党と戦い、死亡

現在はフェイトとともにジュエルシードを集めるため行動している

デバイス：白夜

昔から火彩の相棒

逃げ出した際に研究所からもちだした

極夜の兄弟機であり同じ原初のデバイス

第零世代ともいえるデバイス

モード1

日本刀

白色の鞘に白銀の刀身の刀

モード2

バスターソード

片刃の大剣

わかりやすく言えばFF7のクラウドが持ってたバスターソードを  
細長くしたもの

長さは180cm程

モード3  
籠手、具足

直接格闘戦に特化、攻撃力と破壊力に特化

攻撃範囲が非常に短くなる

モード4 - 1

銃（リボルバーハンドガン）

M29がデザインのモデル 改造して、弾を2発同時発射可能

攻撃力と誘導性と魔力圧縮などに優れている

モード4 - 2

アサルトライフル

M16がデザインのモデル 改造して大型化、狙撃可能なようにスコープが取り付けられ、バレルも延長されている

連射性と砲撃、狙撃、集束などに特化

個人的には白夜のCVは岡本信彦さんだともっている（喋り方がまんま一方通行なので）

その他

影の魔力変換資質

能力は”あつた魔力変換資質の一時的なコピー、魔力吸収、存在隠蔽”

コピーは自由にon/offできる

コピー可能時間はおよそ30分

ただし、

魔力変換資質で攻撃された場合、魔力吸収はできない

強力な攻撃は吸収しきれない

ただし吸収した分の攻撃力は減衰可能

存在隠蔽は影の魔力を纏うことであらゆるリーダー、センサーや感知に反応されなくなる

しかし、五感の聴覚以外は隠せない

光の魔力変換資質

能力”触れたモノの破壊、魔力相殺”

破壊能力は生物には適用できない 理由は不明

魔力相殺は破壊能力の応用

あらゆる魔力を相殺する

ただし、限界は存在する

が、刀夜の影の魔力よりも限界値ははるかに高い

続く…

第29話 やりすぎには注意」…クッ…orn」(前書き)

やりすぎには注意

派手に行くぜ



理由！？知らん！多分、俺が伝説になってるとか言ったからだと思  
うがな！！戦闘狂め！！

零夜「クソオオオオオオオオオオオオオオオオ！！事実を若干ねじ曲  
げてもう少し弱く見せれば良かったああああああ！！！」

さすがに記憶が戻ったからと言って俺が強くなる訳じゃねえんだよ  
オオオオオオオ！！

第一俺自身の記憶じゃなくて”影宮刀夜”の記憶だから！！

さすがに俺自身では二人相手はキツイから！！

シグナム「飛龍：一閃！！！」

零夜「うおおおおおおおおお！！？」

ズガン！！



極夜「了解…」

全力疾走を止め反転し、迎え撃つ

極夜『落ち着いて、記憶をたどれ…刀夜がどうやって八刀一閃をやっていたか、どんな修行をしたか、魂を呼び起こせ!』

零夜「魂を…呼び起こす…!」

ヴィータ「うおらあああああああ!」

零夜「…八刀…一閃…」

シャキン!

ヴィータ「うわああ!」

零夜「…夢幻刀…」

掲げた右手の上に黒い魔力で形成されたで刀が現れる

零夜「…行け…」

シグナムが飛んでくる所に投げつける

無意識下でその作業を俺は行っていた。

シグナム「なッ！？クッ…！」

夢幻刀は回避されたようだな

ならば

零夜「夢幻刀・八閃。」

今度は8つ同時に投げつける

シグナム「紫電…一閃…！」

刀は炎を纏った剣で叩き落とされた。

ならば

零夜「極夜、モード4-1、一撃で仕留める。」

極夜『極めて了解。モード4-1』

零夜「…チャージ…」

右手の銃に魔力を収束、左手の銃は連射による牽制を行う

極夜『完了。』

零夜「…バーストシユート。」

B a n g !

僅かに誘導性がある収束魔力弾を放つ

シグナム「こんなモノッ！」

レヴァンティンで叩き斬るつとするシグナム

通常の弾なら、十分だが…残念ながらこの弾は…

特別製だ

シグナム「ッ!？」

叩き斬ろうと、剣が魔力弾に当たった瞬間、爆発が起きる

バーストシュート…その名の通り、当たったり、衝撃が加わると、大爆発を起こす。

これは魔力収束を僅かに行い、微妙なタイミングで収束を止め不安

定な状態にあえてする事で、収束魔力弾に魔力爆発効果を付与する。

複雑作業が得意なモード4でのみ可能だ。

零夜「…ハッ！やりすぎた…！」

極夜「…まあ、大丈夫だろう…！」

続く

第29話 やりすぎには注意「…クツ…orz」（後書き）

作者「今回は…なんとゲストが来ておりまーす。」

零夜「何い!?!」

作者「俺が秀吉で化物級から主人公の木下秀吉君が来てくれましたア!ではどうぞー。」

秀吉「どーもー、木下秀吉です。」

零夜「なんだアンタか。」

秀吉「そうだ。ちなみに、零夜は俺のトコの小説、俺が秀吉で化物級の後書きにもでているぜ!」

零夜「誰に言ってた?」

秀吉「お前の言葉を借りるなら、読者の方虚無の存在にだな。」

零夜「なるほど。」

デスサイズ・0「秀吉、動くなよ。」

秀吉「え?ああ、わかった。」

デスサイズ・0「Die!!!」

秀吉「うおおお！？いきなり刀で何しやがる！」

デスサイズ・0「ハーレムとか！！死にさせ！！」

秀吉「うおお！？なんかスンドみたいなのがでた！？」

デスサイズ・0「死ねええええええ！」

秀吉「クッ！」

ブンッ！

デ・0「うおお！危ねえな！ツてコンパス！？」

バチバチッ！

デ・0「スタンガンだと！？小癩な！叩き斬る！」

シャキーン！

「って今度は鎖鎌！？ギヤアアアアアアアアア！」

秀吉「鎖鎌が頭に刺さったア!？」

零夜「大丈夫だ、うちの作者はこの程度では死なない」。

秀吉「いや!大量出血してるぞ!？」

零夜「問題ない。」

「アガガガガガ!」

秀吉「さらにスタンガン!?アレ生きてんのか!？」

零夜「生きてはいるな。」

「「秀吉に手をだすな!」」

零夜「あしゆきの言うところの秀吉ラバーズとやらか……」

続く…:だろっな…:

第30話 魂（前書き）

今回はサブタイに零夜コメント無し

派手に行くぜ

### 第30話 魂

「負けた……」

零夜「……………」。

シグナムとヴィータが二人してorzになっている。

いや、まさか八刀一閃が出来るなんて思ってなかったし…その後の夢幻刀もバーストショットも無意識下の行動だったし…

あるえ？

なんで無意識下でこんな事出来たんだ？

んでもって、もう夜になっていた

まあ、俺は寝ているわけなんだが

.....おい.....

ん？なんか聞こえる。

…気のせいか

…おい

…気のせい…だよな…

…起きろ！

…起きろって？寝かせるよ…朝からあの二人に追い回されて、戦って、疲れてんだよ…



”影宮刀夜”がいたのだ

刀夜「おい…なんか、鳩が砲撃食らったみたいな顔してるぞ？あ、いや散弾だったっけ？まあなんでもいい」

零夜「お前は…誰だ？」

刀夜「分かってんだろ？俺が誰で何者なのか。」

零夜「俺…いや、俺の記憶、魂、血…か。」

刀夜「そう、俺はお前でお前は俺だ。」

零夜「何の用だ…」

刀夜「ん？ああ、記憶を取り戻したろ？まあ”俺の”だが…ん？だが俺はお前でお前は俺だからお前の記憶でもあるわけか。まあそんなことはどうでもいい、記憶は完全じゃあなかったはずだ。」

零夜「ああ。」

刀夜「いや、それでイライラしてるから色々話をしてやろうと思っ  
てな。」

零夜「なら早くしてくれ、眠い。」

刀夜「まあ面倒だから単刀直入にいくぞ、お前の魂は半分しかない。」

零夜「…は？」

刀夜「半分は俺のだからな。まあ速い話意識が二つあるわけだ。」

零夜「まさか今日無意識で戦ってたのは…」

刀夜「俺が体を拝借して戦ったからだ。」

零夜「じゃあ俺の記憶は！」

刀夜「俺が封印してる、悪いが、記憶を解放するわけにはいかない。」

零夜「何故だ。」

刀夜「お前が知るにはまだまだ早い。ま、俺が良いと思ったら思い出させてやるよ。」

零夜「…わかった…」

刀夜「へえ…意外と素直だな。」

零夜「どうせ何を言っても無駄だろう？それにしつこく迫られるのは苦手なのは分かってる。」

刀夜「まあ…そうだな。よし、そんなお前に1つ、プレゼントをや

る。右手を出せ。」

零夜「はいよ。」

刀夜は俺の右手を自分の右手で掴んだ。

刀夜「俺のクソ親父から受け継いだ力。悪魔デビルプリンガーの右腕を目覚めさせてやるよ。ああ、あと、見た目がえらいことになるが、ちゃんと元に戻るから心配するな。じゃ、また会おう。」

その瞬間、俺は意識を手放した。

続  
く  
…

### 第30話 魂（後書き）

作者「さああああてええええ！今回も”俺が秀吉で化物級”の主  
人公、木下秀吉がゲストで来てくれてますぜえええええ！」

秀吉「どうもー！」

零夜「作者、1つ問いたい。」

デ・0「なんだ？」

零夜「あのバイクは何だ？」

デ・0「後で分かる。」

零夜「そうか。」

秀吉「そう言えば、うちの作者が遅れて来るらしいぜ。」

作者「そうかい、ならば回し蹴りでも練習しておくか。」

零夜「秀吉、毎日大変らしいが…体は大丈夫なのか？」

秀吉「ああ、問題はねえよ。…多分…」

零夜「まあ…いざとなったら俺と火彩を呼んでくれてかまわないからな。」

火彩「そうだ、なんならお土産も持って行ってやるぞ。」

秀吉「おう！ありがとうよ！」

デ・0「奥義！5回転回し蹴りイイイイイイイイイイ！…！」

あしゆき「すんませーん！遅れまアグボアアアアアアアアアアアアア  
アアアア！！！！！！」

デ・0「あ」

秀吉「あ」

零夜「あ」

火彩「あ」

あしゆき「グフッ……」

デ0「……ヤベエ……」

秀吉「大丈夫だ。多分生きてる。」

零夜「すごい生命力だな。うちの作者の奥義、5回転回し蹴りを食らって生きてるとは……」

デ0「今だ……！秀吉イ！覚悟！」

ドウルン！ドウルウン！

火彩「あのバイク、秀吉をひくためかよ!!」

秀吉「アホ作者!後は頼む!」

あしゆき「うん?なんだ?ツてなんかすごいのが来たアアアアアアアアアアアア!」

デ・0「食らいなア!」

秀吉「ほいつ!」

あしゆき「ギヤアアアアアアアアアア!」

零夜「自分とこの作者を盾にしたアアアアア!??」

デ・0「貴様アアアアア!逃がすかアアアアア!」

火彩「あ、どっか行っちゃった!」

あしゆき「なんで…こんな…ガクッ」

「この後書きは終わらぬよ！

第31話 結局の所親友は一番頼れる「…まあな」(前書き)

ようやく本来の主人公登場

派手に行くぜ

第31話 結局の所親友は一番頼れる「…まあな」

デビルプリンガー  
悪魔の右腕

最初は意味が分からなかった

だが、目覚めて俺は気付く。

確かに、デビルブリンガー悪魔の右腕だと。

零夜「……。」

朝起きて、とりあえず右腕の包帯を取ってみた、が特に変化はないようだった。

……ハツタリか？

それともただの夢だったのか？

零夜「……まあいいか……」

俺はリビングへ向かった

おっと、その前に顔を洗うか。

零夜「おはよう、はやて、シャマル、シグナム、ザフィーラ。」

はやて「おはよう、零夜君。」

シグナム「おはよう、零夜。」

シャマル「おはよう、零夜君。」

ザフィーラ「…ああ…おはよう…」

零夜「…ヴィータは？まだ寝てるか？」

はやて「うん、ゆっくり寝てるわ。」

シャマル「ヴィータちゃんは朝弱いですから。」

零夜「ま、仕方ないさ。っと、噂をすればたな。」

ヴィータ「ん…おはよ…」

零夜「…まずは顔洗ってこい…」

ヴィータ「ん…」

ヴィータはそのまま洗面所までぶらぶらと歩いて行った。

零夜「はやては、今日病院だったっけ。」

はやて「うん、今日はシャマルとシグナムに着いてきてもらうから、零夜君はゆっくりしてて。」

零夜「ああ、そうさせてもらうよ。」

零夜「と言つ訳で…市内をつろついでみることにしたが…」

極夜『零夜、読者の方久々に虚無の存在への語りかけが口に出ているぞ。』

おっといけねえ……油断するとすぐ口に出ちまつ……

零夜「さて……どうするかな……」

そう

俺は道に迷ったのだッ……！

零夜「参ったな……まあ……いざとなったら飛んで行きゃあいいんだけど……極夜……どうすればいいだろうか？」

極夜『私に聞くな。』

零夜「どーすつかねえ………歩き回るか……」

極夜『…間違い無く余計に迷うぞ。』

「あの〜…」

零夜「ん？」

声を掛けられ、振り返ると、栗色の髪を二つに結んだ女の子が居た

…たしか…火彩と戦う前…反対側に居た子だな…

「もしかして…火彩君のお友達…ですか？」

まて…火彩を…知っている…！？この子からすれば敵側では？

零夜「どうして火彩の事を知っている！？」

「あわわわわっ！！そ、そこはちゃんとお話するから離して〜〜  
！！」

零夜「あっ…す、すまない…」

つい肩を揺すってしまった…

「だ、大丈夫……確か火彩君から多分こうなるって聞いてたから……」

零夜「アイツ……」

「にやはは……でも、火彩君、”アイツは良いヤツだ、何かあったら俺の名前を出して助けてもらえ。”って言ってたよ？すっごく仲が良  
いんだね。」

零夜「まあ……仲は良いな……」

「あ、名前を言うの忘れてたね。私、高町なのは。」

零夜「一応名乗っておく、影宮零夜だ。よろしく。」

なのは「道の真ん中で立ち話は駄目だよね、ちょっと着いてきて。」

零夜「ああ。」

零夜「喫茶店…？」

なのは「そ、喫茶翠屋。私のお父さんとお母さんが経営してる店なの。」

零夜「なるほど…」

零夜「…聞かせてくれ、火彩と…あの…火彩の横に居た…あの子…  
たしか…フェイト…だったか？それと君の後ろに居た、あの水色の  
服の…」

なのは「氷雨君かな？」

零夜「出来るだけ聞かせてほしい。」

なのは「うん、まず私が魔法と出会ったときの話から…」

続  
く  
…

第31話 結局の所親友は一番頼れる「…まあな」（後書き）

「どーも、作者のデスサイズ・0、略してD0です。」

零夜「主人公の影宮零夜です」

秀吉「俺が秀吉で化物級の主人公、木下秀吉です。」

D0「さて、早速だが秀吉、何故君はそんなにハーレムを形成して  
しまい、一瞬で女性を落とすのかね？」

秀吉「作者の趣味だな。」

D0「そつか、ならYou shall die!」

秀吉「うおッ!?!」

零夜「相変わらず作者は嫉妬の力で無駄に強くなるな…」

D0「アンタは一体何なんだアーーーーッ!!!!」

あしゅき「通りすがりの仮面ライ「アンタには聞いてない!」!」

…orz

ヒュウウウウ…

零夜「…何の音だ？」

ドゴオオオン！！

秀吉「なんか機動戦士みたいなのが降ってきたアアアア！？」

あしゆき「アレだね、秀吉ラバーズね科学力を結集したんだろうね。  
秀吉の首を狙うデスサイズ・0さんを粛正するために。」

零夜「本当にウチの作者がご迷惑を…」

DO「うおおおおおおお！？なんか殴ってきた！？」

零夜「死んだな。」

秀吉「死んだね。」

あしゆき「死にましたね。」

D O 「ところがギッチョン！そうは問屋が許さないぜ！」

秀吉「機動戦士モドキの拳を刀で受け止めた！？」

あしゆき「まるでDMC4の最後の方のシーンみたいだ。」

D O 「…勝ったか…」

零夜「ん？なんだ？メモ書き？どれどれ…『この機動戦士は機動後3分で爆発します』……逃げるオオオオオオオオオ！！」

D O 「あ！ちよ！くそつたれええええええええええええ！！！！」

ドゴオオオオン！！

D O 「ギヤアアアアアアアア！！」

秀吉「煙がドクロWWW」

あしゆき「ヤツーマンみたいだなWWW」

零夜「確実に死んだな。」

D O 「あー、死ぬかと思った。」

「「「生きてたアアアアアアアアアアアア！」」」

謎の戦いはまだまだ続く！

第32話 悩めばいい…そうして人は前へ進んで行く…（前書き）

もう今回みたいな話の時はサブタイトルの「」内は無しで。

派手に行くぜ

第32話 悩めばいい…そうして人は前へ進んで行く…

…ああああ…なんか…話が…ループしてる…  
とりあえず…重要だと思ったところだけどうぞ…

なのは「で、私と氷雨君が出会ったのが、ユーノ君と魔法の練習してた時間でね、私に魔法の事をたくさん教えてくれたの！」

その…氷雨と言うヤツ…あってみたいものだ…

なのは「で、どこから来たのか聞いたけど、分からないって言うから今はうちに居てもらってるの！今は…多分散歩に行ってるんじゃないかな。」

零夜「うんうん…」

なのは「でね！氷雨君が私がピンチの時に……

Ok…なのは…君がどれだけその”水川氷雨”と言っヤツの事が好きなのかよく分かった…

頼むから火彩の話を…

なのは「で、最後にフェイトちゃんと戦った時に火彩君と氷雨君も少し離れて戦ってたの。」

零夜「…分かる範囲でいい、その話を聞かせてくれないか？」

なのは「うん…私は…分からないなあ…」

「なのはー!」

なのは「あ、氷雨君!」

なるほど…彼が…  
右目の眼帯が気になるが、聞かずに置こう…

氷雨「なのは、この子は?」

零夜「影宮零夜、だ。よろしく。」

氷雨「ああ、君が火彩の言ってた零夜君か。僕は水川氷雨みずかわひさめ、よろしく。」

なのは「氷雨君、どうしたの?」

氷雨「うん、フェイトと火彩からまたビデオレターが届いたから知らせに来たんだ。」

なのは「本当に!?」

零夜「ああ…アイツら…今は管理局にいるんだっただか……」

氷雨「君も見に来ないか？」

零夜「いや、遠慮しておく。帰りが遅くなると家族が心配する。ああ、ビデオレターなら返事するだろう？火彩に俺からの伝言を伝えてくれ。」いざとなったら俺の両親、影宮剣夜、影宮零華、この二人の名前を使えばいい。大体は何とかなる。」と。」

氷雨「分かった。確かに伝えておくよ。」

零夜「さて、俺はそろそろ帰るかな。お土産に…何か買って帰りたいんだが…何がオススメかな？」

なのは「うん……」

零夜「…まあ…金がありませんが…」

なのは「あーじゃあ、シュークリームとかは？」

零夜「シュークリームか…よし、そうするか…」

と言っのが俺がまとめた結果だ。

本来はこの倍以上の長さがあった

だがぶっちゃけどうでもいい話（俺にとって）が7割で、**重要な話**  
（俺にとって）は3割だった

つまりスルーしてしまった訳だ。

そして俺は今、帰宅途中である。

零夜「もう4時か…はやてはもう帰ってるかな。」

極夜『私達と同じくらいだと思うが。』

零夜「図書館行ってる可能性もあるな。」

極夜『零夜、どうやら私の勘が正しかったようだぞ。』

零夜「あ？」

はやて「あ、零夜君！」

極夜『な？』

零夜「ああ…お前、よくわかったな…」

極夜『まあな。』

はやて「何の話？」

零夜「いや、大したことじゃないよ。それよりはいい、お土産。シュークリーム、買ってきたよ。」

はやて「これ、翠屋のやつちゃん！」

零夜「そんなに有名なのか？」

はやて「めちゃくちゃ有名やで！？知らなかったん！？」

零夜「うん…まあ…知らなかった…」

はやて「よく買ったなあ…」

零夜「まあ…な…ある意味…火彩のおかげみたいなものだけ…」

はやて「ふうん…一回、あってみたいなあ…今度、連れてきてくれへん？」

零夜「あ〜…ちょっと…アイツ、しばらく遠出するから帰るのはかなり後になるって言うてたから…しばらくは会えないなあ…」

はやて「そっかあ…それは、ちょお残念やなあ…。」

零夜「ま、帰ってきたら連絡はくれるらしいから、その時に…な？」

シグナム「主はやて、零夜、そろそろ、家に…」

零夜「そうだな、速くコレを食べよう。」

そして、翠屋のシュークリームはみんなでおいしくいただきました

零夜「はあ……」

俺は、自室で寝そべりながら考えていた

ソルジャー  
戦士として、これからどうするか

俺の夢……ソルジャー戦士として人々の役に立つなら、ここを……はやてのものを  
離れなきゃならない

けど……けど、その夢と同じくらいに……このままはやてたちと一緒に  
ここで暮らしていたいと言っ気持ち強い……

夢……と……心……

俺は……どうしたらいいんだ……

零夜「俺は…俺は…どうしたらいいんだ…夢を実現したいのに…  
はやてと離れたくない…なんなんだよ…これは…」

極夜『…零夜…それはな…お前がはやての事を好きだと言っことだ  
と思っぞ…』

零夜「俺が？はやての事を好き…？俺は…はやての事が…好きなの  
か…？」

…その通りだ！

頭に声が響く

零夜「グッ…」

激しい頭痛に襲われる。

そのまま、俺は意識を手放した。

零夜「……またお前か…刀夜…何の用だ？」

刀夜「いや、お前の悩みを解決する方法を教えてやろうと思ってな。まあ、ヒントだけだな。」

零夜「ヒント？」

刀夜「まず一つ。…あの子…はやてだっけか？あの子の気持ちを考えてやれ。二つ目。お前はもう少し欲張れ。欲が無さ過ぎだ。三つ目。お前の魂はなんと言ってる？心は？なんと言ってる？考えてわかんないなら、頭で考えるな。魂に従え。お前のお前自身の魂に…な…」

零夜「魂…に…」

刀夜「ああ、そうだ最後に一つ。お前はあの子の事が好きだろう。ただ、それが”like”なのか”love”なのか、よく考えてみる、わかんなかったら……コレばかりは知らん!!」

そして、再び俺の意識は遠のいていった…。

零夜「……ハア……」

わざわざ俺の魂を自分の魂の空間に呼び出して言うことか…？

いや…まあ…ヒントにはなったかな…

零夜「はやての…気持ち…か…」

また悩む事になっちまったな…

続く…

第32話 悩めばいい…そうして人は前へ進んで行く…（後書き）

DO「This party's getting crazy!  
Let's rock!!」

零夜「どうも、主人公の零夜です。」

火彩「後書きに久々の登場、闇咲火彩だ。」

秀吉「俺が秀吉で化物級の主人公、木下秀吉だ。」

DO「Heyheyheyhey!! What's  
up?  
Is that all your that!？」

あしゆき「You must die!!」

零夜「何言ってるんだ？」

秀吉「和訳するところだな」

D O「オラオラオラオラオラ！どうしたア！？それがお前の本気が  
!?!」

あしゆき「死ねッ！」

秀吉「こんな感じだな。」

零夜「さすが秀吉。」

火彩「あの二人は何で戦ってた？そして何故、あしゆきは仮面ラ  
イダーフォーゼに変身してるんだ？」

秀吉「…俺の所の後書きを見ればわかる」

零夜「あと此処の2話くらい前の後書きもな…」

D O「くらいやがれ、超必殺、Rising dragon!」

あしゆき「ギャアアアアアアアアアアアアアアア!」

秀吉「やっぱ負けちまったか」

零夜「ああ。」

火彩「元の戦闘能力の差だな。」

秀吉「昇竜拳だもんな、あの技。うちの作者がいくらフォーゼに変身しても圧倒的差がある。」

DO「つしゃあー!!」

あしゆき「我が生涯に…一片の悔い無し…」

火彩「死兆星指しながら倒れたぞ。」

秀吉「大丈夫だ、問題ない。」

意味WAKARANが続く！

第33話 余計なことはするもんじゃない 「全くだ。」 (前書き)

初、零夜以外の視点で書いてみた

派手に行くぜ

第33話 余計なことはするもんじゃない 「全くだ。」

sideはやて

私は、零夜君の部屋にお風呂上がって、開いたから入ってって言いに行った、そしたら部屋の中から零夜君の声が聞こえてきた

零夜「…やっぱり俺…はやての事が好きなんだ…」

驚いてつい部屋の前で呆然としてた…

でも、嬉しかった

だって、私も零夜君の事が好きやったから。

だから - - - - -

はやて「零夜君…」

私は零夜君の部屋に入った

零夜「はやて…どうした？」

零夜君の顔が紅い

けど…多分私の顔はもっと紅いと思う…

それでも…言わなあかんことがあるんや…

はやて「零夜君…あの…その…零夜君は私のこと…好き？」

零夜「へえあつ！？／／／／／／／／／／／／」

はやて「……どお？」

零夜「…それは…その…」

はやて「私は…大好きやで、零夜君のこと／／／／／／／／／／／」

零夜「……そう…か…そういうことか…うん、俺も…俺も、はやてのことが大好きだ…！家族として…だけじゃない…はやてのことが、一人の女の子として。／／／／／／／／／／／」

はやて「じゃ、じゃあ…」

零夜「……ストップ…」

はやて「？」

零夜君がドアを開けた

ヴィータ「うわっ!？」

シャマル「きゃあっ!？」

シグナム「おおっ!？」

零夜「…やっぱりか…」

どうやら三人が聞いてたみたいや

はやて「…はうううう…//////」

零夜「どっから聞いてた？」

零夜君が刀を持って尋問してる。

本気で怒ったみたいやな…

シャマル「その〜…け、結構始めから…」

はやて「私が部屋に入ったくらい…？」

ヴィータ「そ、その少し後…」

零夜「…よし！三人共、言い訳は後で聞くから正座して目をつぶれ！」

「…は、はいいいい！…」

零夜「よし…！まず一発！」

パコーン！

ヴィータ「あだっ！？」

零夜「次、もう一発！」

パコーン！

シヤマル「きゃあっ!?!」

零夜「これで最後だ!」

パコーン!

シグナム「っ!?!?!?!?!」

な、なんて威力のでこぴんや…あの三人、ましてやシグナムまでもが威力だけで思っきりのけぞったで!?!?  
零夜君マジギレやん!

あ、でも私も後一発ずつ後でやっところ。

せ、せっかく私が勇気出したのに…

盗み聞きはあかんで…

ってまだ同じ威力のを!?!?

はやて「ね、零夜…その…あんまりやりすぎたらあかんで…」

零夜「はっ！？俺は一体何を！？」

「「「まさかの無意識！？」「」」

零夜「…えーと…はやくも俺も実はお互いの事が好きでドアを開けたら三人が居て…ってことは／／／／／／／／／」

はやく「き、聞かれてみたいやな…／／／／／／／／／」

シャマル「（今の内に！）！シグナム！ヴィータちゃん！行くわよ！」

ヴィータ「え？うええ！？」

シグナム「な、何をする！？」

……二人ともシャマルに引きずられていった…

…ナイスや、シャマル。

零夜「……………」

はやて「……………」

…あかん…めっちゃ気まずい…

零夜「…はやて!」

はやて「ひゃあっ!?!?!?」

あわわわわわ…////////////////と、突然抱きしめられたああ  
ああ!?!?!?!?!?!?!?!?!?!

か、顔が…近い…//////////////

零夜君…顔もカツコイイから凄いドキドキする//////////////

零夜「ごめん、はやて…俺…何を言えばいいか…分かんなくなつて…  
…思い切つて…つい…」

はやて」「はふう……」

零夜「……はやて？」

はやて」「ふにゃあ……」

零夜「……どーしょ……はやてが……」

……こんな幸せが……ずっと続いたらええなあ……

続く……

第33話 余計なことはするもんじゃない 「全くだ。」（後書き）

DO「アグボアアア!!」

火彩「…またか…」

秀吉「おいしいい!!?いきなり錐揉み回転して飛んでるぞおおお!!?」

「秀吉君に余計な手をだすなあああ!!」

DO「あぎゃあああ!!!!つてふざけんああ!!」

秀吉「リンチ!?!」

火彩「怖ろしいな…」

DO「やっと帰ったか…」

ドウルン!ドウルウウウン!

火彩「あ?バイクのエンジン音?」

あしゆき「遅れてすいませーん!」

ドゴッ!

DO「オンドウルルギッタンスカアアア!!」  
キラーン!

火彩「あ」

秀吉「あ」

あしゆき「あれ？デスサイズ・0さんが居ない？零夜君も居ない？」

火彩「…零夜ならあそこで…」

あしゆき「ああ…なる程ね…はやてと…ねえ…（ニヤニヤ）よし！  
秀吉、帰るぞ！サイドカーに乗れ！」

秀吉「わかった。」

あしゆき「じゃー！」

ドウルウウウウン！

秀吉「オイ！なんかモンスターみたいなのが出たぞ！」

あしゆき「まかせな！」

（BGM：FF7戦闘曲、たたかう者達）

秀吉「って何でFF風バトル!？」

あしゆき「サンダガ！」

秀吉「って何やってんだよ！」

あしゆき「お前も戦え！」

秀吉「わかったよ！ええと…とりあえず”たたかう”だ！」

ドカバキボコッ！

テテテテーテーテッテテー

あしゆき「さすが秀吉…チートだ…まあいいや、帰るぞ。」

秀吉「ってまたきたあああ！」

あしゆき「面倒だ！」

ジャキン！

秀吉「バイクから剣がでてきたア!？」

あしゆき「食らえ！」

秀吉「何てヤツだ…！」

まだオワランヨ！

第34話 二人の仲は限界突破「ま、まだそこまでじゃねえよ……／＼／＼／」

今回は甘いです

自分でもびっくりにくらい甘いです

ブラックコーヒーがカカオ80%くらいのチョコを用意して覚悟してお読みください。

それでは

派手に行くぜ

第34話 二人の仲は限界突破「ま、まだそこまでじゃねえよ……」

Side 零夜

数日後…

はやて「零夜君、今日は昼ご飯…何作るかな？……」

零夜「そ、そうだな…8月になって…まだまだ暑いから…ざるそばとかは…？……」

ヴィータ「…く、空間全てが…甘い…」

シグナム「…甘い…しばらくは砂糖がいらない気がするな…」

シャマル「いいわねえ…（ニヤニヤ）」

ザフィーラ「…主が幸せなら、それで良い…」

四人がなんか言った気がするが、気にしない、気にするつもりなど毛頭ない

そんなことよりはやてと居る方が大事だ。

はやて「じゃあ、買い物行こか // // // // // //」  
零夜「ああ、行こう // // // // // //」

零夜「なあ、はやて。」

はやて「ん？どないしたん？」

零夜「はやて、俺って欲が少ないかな？」

はやて「うん。」

零夜「即答か…」

はやて「もうちよっと私らを頼ってほしいかな。」

零夜「…そうするよ…よく考えたら…ほとんど自分でなんとかして  
たもんな………」

はやて「まあ、そこが零夜君の良いところであり悪いところだね。」

零夜「けど、はやても…ちよっとそんなところあるだろ?」

はやて「う…言われてみれば…ちよっと…」

零夜「…じゃあ…お互い、みんなで頼って行くって事で…//」

はやて「うん!//」

「「ただいま！」」

はい、色々すっ飛ばして帰宅。

零夜「はやて、大丈夫か？」

はやて「うん、大丈夫やで。」

零夜「よかった、今日はやけに暑かったから心配だったんだ…」

はやて「もう…心配し過ぎやって…嬉しいんやけど／／／／／／／／」

零夜「まあ…はやてに何かあったら大変だし…／／／／／／／／」

ヴィータ「…今ならブラックコーヒーでも飲めそうだ…甘過ぎてる…」

シグナム「…普通の人なら糖尿病になりそうなくらい…甘い…」

シャマル「あゝもう見てて楽しいわあゝ…（ニヤニヤ）」

ザフィーラ「…楽しいのか…？」

ザフィーラ「…的確なツツコミ、ナイスだ…俺も思ったぞ…」

はやて「じゃあ、早速始めよか」

零夜「ああ！」

はやて「じゃあ、5分計ってくれる？」

零夜「わかった!」

はやて「じゃ、食べよか。いただきます!」

「「「「「いただきます!」「「「「「

零夜「あゝ…やっぱりはやてが作った料理は何でも美味しいなあ……  
…毎日食べていたい…」

はやて「もお…／／／／／そんな事…言わんでも毎日食べさせてあげるのが…／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／  
げやし…／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

ヴィータ「…甘過ぎる…甘過ぎてもう蕎麦が砂糖の味かしねえ…」

零夜「はやて、今日は何を読む？」

今は、図書館に家族全員で来ている。

はやて「そつやなあ…また、童話を読もうかな…」

零夜「OK、じゃあ向こうだな。」

すげえ今更だけど、前に見つけた父さんの本

古代ベルカ文字読めるから読んだら

全部マスターしてる魔法でしたとさ

ハハツ   ワロスWWW

全く訳にたたねえ

零夜「さてと…俺は何を読むかな…」

何となく適当に小説を手にとってみる。

……何だこの本…

俺が秀吉でお兄様!?

………どこかで見たような気が…

ま、いつか。

はやて「零夜君、珍しくたくさん借りたなあ……」

零夜「まあね。」

つい面白くて……俺は全巻借りてしまったのだ……

はやて「じゃあ、帰って晩御飯の準備や！」

帰宅！

ヴィータ「はやてー！今日の晩御飯、何？」

はやて「ふふふふふ…今日はな…お好み焼きや！」

ヴィータ「おお！アレか！アレは美味かったからなあ〜楽しみだ！」

はやて「さあ！みんなで準備するで！まずはシャマル、野菜切ってくれる？で、ヴィータは山芋するのを手伝って！」

「「はい！」」

零夜「よし、俺はホットプレートを用意する。」

シグナム「では、私も手伝おう、一人では重いだろ。」

零夜「いや、いいよいいよ、はやてを手伝ってあげてくれ。」

一心デビルプリンガー悪魔の右腕だから力は凄い

はず…

零夜「つらあ！」

よし、やはりこの悪魔デビルプリンガーの右腕は見た目が通常の右腕でも力は凄まじいな。

力の調節はまだ完璧には出来ないけど。

この前なんて突然箸を握りつぶしてしまったり、ボールペンが砕け散ったり…

色々大変だった…

零夜「はやて、準備出来たぞ。」

はやて「こっちも準備OKや！さあ、焼くぞ！」

零夜「楽しみだ。」

はやて「はい、零夜君。」

はやてに豚肉のお好み焼きを取ってもらおう

零夜「ありがとう、はやて。」

シグナム「シャマル、その海鮮のを取ってきてくれ。」

シャマル「はい、どうぞ。」

シグナム「ん、ありがとう。」

ヴィータ「アニキ、あたしにも豚肉のを取ってきてくれ!」

零夜「はいよ。」

ヴィータ「ありがとう!」

はやて「れ、零夜君!」

零夜「ん?」

はやて「あ、あーん……// // // // // // // // // //」

零夜「え／＼／＼」

マジですか…ここでそれをやるんですか…

ま、いいけどな／＼／＼／

零夜「あ、あーん…／＼／＼／／／／」

はむっ…

はせて「ぶ、ぶっ…？／＼／＼／／／／／／」

零夜「あ、ああ…美味しいよ…／＼／＼／／／／／／」

実際は、緊張で味など解らなかったが。

…ハア…

いいものだな…

続く…

第34話 二人の仲は限界突破「ま、まだそこまでじゃねえよ…」

DO「どうも、最近友人にマテリアルゴーストの疑いを掛けられた作者、デスサイズ・0です」  
零夜「主人公、影宮零夜です。」

はやて「ヒロインの八神はやてです！」

秀吉「俺が秀吉で化物級の主人公、木下秀吉だ。」

あしゆき「で、その作者、あしゆきです。」

DO「あしゆき、秀吉」「ゴブハアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

秀吉「な、なんて甘さだ…危うく死ぬところだったぜ…」

あしゆき「この俺が…ここまで吐糖するとは…恐ろしいもんだ…」

DO「書いた俺が一番つらかった…書きながら吐糖して何度気絶したことが…」

はやて「なあ、零夜君…今日、零夜君と一緒に…寝たいなあ…」

零夜「あ、ああ…いいよ…むしろ、いつでも…大丈夫…」

D O、あしゆき、秀吉「ゴブゲバアアアアアアアアアアア  
アア……!」「」

あしゆき「だ、駄目だ……精神力が持たない……俺のもう一つの人格が  
ッ……」

秀吉「……」(返事がない。ただのしかばねのようだ。)

D O「クッ……しかたあるまい……きよ、強制終了だ……」

続かなければ生き残れない!!

第35話 海へGO!!「楽しみだ…」(前書き)

みんなで海に行く話

派手に行くぜ

第35話 海へGO!!「楽しみだ…」

あれは…今から2日前の事…

はやての一言から始まった

はやて「海へGO!!」

零夜「何故こうなったし」

はやて「ふふふふふ〜」

零夜「何故こうなったし」

極夜『あきらめたほうがいいかと』

零夜「なあ、なんでまた急に海に行くなんて言い出したんだ？」

はやて「なんとなくやー!」

…マジか…

ま、いいんだけど

と言う訳で、俺たちは海…ビーチにいる

パラソルもたてた！

ビニールシートもひいた！

椅子も置いた！

飲み物も準備した！

零夜「じゃ、いくか。」

はやて「私は、ここで待ってるわ。」

シャマル「あ、私もここで待ってまーす。」

ヴィータ「なんだよ、シャマル泳げなかったっけ？」

シャマル「まあ、そんなところね…」

シグナム「では、仕方ない。我々だけで行こう。」

零夜「まあ、まずはすぐ戻ってくるよ。」

零夜「よーし…最速を目指すか…」

そういえば昔（刀夜の時）、海でサメみたいなのに出会って、ぶっ飛ばされたな…

むかついで三枚に下ろして食ってやったけど

…アレはなかなか美味かった

零夜「うおおおおお!」

ヴィータ「速っ!…なんつー速さだ!」

シグナム「あの速さはどう見ても1000m10秒前後だぞ！」

そりゃそうだ、鍛えてるからな

水中戦もなんども経験している

水中では地上とはかなり力の使い方が違い、体力を消費しやすい。

しかし、水中で何度も経験すれば、なんとかなる

何事も経験が大事なんだな、経験が

零夜「ふう…」

今は泳いだ先の岩の上で休憩中

零夜「さて…もどるかな…」

「（おい零夜、聞こえるかー！）」

零夜「…あ？火彩？」

火彩「（おー！聞こえたか！いや、超長距離思念通話のやり方を思い出したからやってみたんだ。）」

零夜「…そっぴや昔そんなのやってたなお前…」

火彩「（で？今は何してんだ？）」

零夜「海のと真ん中にいる。」

火彩「（…すまん、何をどうしたらそんな状況になるんだ？）」

零夜「（家族で海に遊びに来て泳ぎまくったらこうなった。）」

火彩「（…All right…もう何もつっこまねえよ…。）」

零夜「そういえば、この間…高町なのはと…水川氷雨だったか？あの二人に会ったぞ。」

火彩「ああ、知ってるよ、ビデオレターで言ってたしな。二人ともいいヤツだったろ？」

零夜「……………ああ……………まあな……………」

火彩「（その様子じゃ…大方、フェイトの話を延々と聞かされたんだな……………」

零夜「ああ…軽く2時間近くな……………」

火彩「（……………お疲れ……………」

零夜「…一つ聞きたい」

火彩「（ん？なんだ？）」

零夜「…いつ頃こっちに来れる？」

火彩「（そうだな…勝利確定の裁判だが…まあしばらくかかるな…  
…ま、うまいこと行って今年中にはそっちに行けるさ。）」

零夜「そのときには連絡してくれ。家族にお前の事を話したら会いたいと言ってたからな。」

火彩「（あいよ。…フェイトか？なに？時間？わかった、すぐ行く。）」

零夜「…時間切れみたいだな。」

火彩「（ああ、残念ながら。そっちに行く時は、フェイトも連れてくわ。）」

零夜「わかった。暇なときにも連絡してくれてかまわない。」

火彩「（ああ、じゃあな。）」

零夜「ああ。またな。」

はやて「あ、零夜君おかえりー」

零夜「ただいま。」

はやて「聞いたで、物凄い速さで泳いでいったらしいやん。」

零夜「ああ…まあ…ね…」

はやて「随分遠くまで行ったみたいやな。だいぶ帰って来るの遅かったし。」

零夜「いや、火彩から連絡が入ってね。ちょっと話してたんだ。アイツ、今年中には戻れるからその時にはには家に来たいってさ。」

はやて「それは、楽しみやなあ。」

零夜「どうやら、友達も連れてくるらしいぞ。」

はやて「ますます楽しみや！」

零夜「もう昼か……」

はやて「じゃ、お弁当食べよか！私と零夜君の最高の弁当やで」

零夜「は、はやて……大げさだ……」

シャマル「ちなみに私も手伝いました！」

シグナム「なん……だと……」

ヴィータ「……大丈夫なのか？」

零夜「大丈夫だ、問題ない。」

はやて「具材を切ってもらったりしたただけやから、大丈夫や。」

シグナム「まあ…主はやてがおっしゃるなら…」

ヴィータ「アニキも言ってることだしな…」

零夜「つかそれだけで何か起きたら逆に凄いで…」

ヴィータ「…いや、シャルルは何が起こるかわかんねえからな…」

「」「」「確かに」「」

シャルル「え〜〜!? ひーどーいー!」

はやて「じよ、冗談やって! なあ!」

零夜「あ、ああ…。」

ヴィータ「お、おっ」。。

シグナム「は、はい…。」

ザフィーラ「……。」

なんか言え…ザフィーラ…

零夜「と、とにかく気を取り直して…いただきます！」

「……………いただきます。」

ちなみに弁当箱はでかい重箱で3段になっている

中身は一段目がおにぎり、二段目がおかずで、玉子焼きとか野菜とか、そう言うのが入ってる。

で、三段目は、唐揚げとか、ウインナーやらが入っている。

さらに別に、クーラーボックスの中に俺特製アイスが入ってる。

ヴィータが物凄い楽しみにしていたな

ヴィータ、アイス好きだからな。

零夜「はやて、あーん…// // // // //」

はやて「あーん…あむっ…// // // // //」

零夜「美味いか？」

はやて「うん！」

零夜「んじゃあ、食べたからまた泳いでくるよ。…そうだ、はやても一緒に泳ぎに行こう、俺がおぶって行くから。」



じゃあなんでやったんだって言われそうだが気にしない

零夜「はやて、すっかりつかまってるよ……」

はやて「う、うん……」

静かに海に入っていく

始めは浅い所にいたが、しばらくして深いところに泳いでいった

零夜「はやて、大丈夫か？水が口とかに入るようなら肩を叩くなりしてくれ。」

はやて「うん…大丈夫…」

零夜「よし、もう少し行くぞ…」

はやて「零夜君…そろそろ…戻りたいんやけど…」

しばらく泳ぎ回って、あちこちを見て回った後、はやてが俺の耳元で呟いた

零夜「ん、了解。急ぐよ。」

最高速度、とは行かないがかなりの速さでビーチまで戻っていく。俺に掴まるはやての腕の力が少し強くなる。

零夜「はやて、もう直ぐ、着くぞ。」

はせて「…うん…」

気のせいか、声が少し残念そうな感じがした。

零夜「ふう……よつとー!」

はせて「きゃッ!?!」

再びお姫様抱っこをして、戻っていく。

はせて「うう……やっぱり恥ずかしい……  
／／／／／／／／／／／／／／／／」

零夜「が、我慢してくれ……コレが一番早いんだからな…  
／／／／／／／／／／／／／／／／」

はやて」「う、うん…／／／／／／／／／／」

零夜「……／／／／／」

はやて「……／／／／／」

「た、ただいま…／／／／／／／／／／」

ヴィータ「…マジではやて背負って泳ぎ回ったのかよ…」

零夜「ああ…／／／／／／／／／／」

はやてをシートの上に降ろしながら、答える。

シグナム「しかし…その小さな体のどこにそんな体力があるんだ…」

零夜「鍛えてるからな……」

シグナム「…鍛えてるとかそんな話ではすまない気がするのだが…」

零夜「……戦士ソルジャーだからな…経験だよ経験。水中戦とか、何度も経験していたらだいたい何とかなる……多分……」

シャマル「まあ、とにかくお疲れ様。はい、スポーツドリンク。」

零夜「お、ありがとう。のどが乾いてたんだ……」

500mlペットボトルの中身を一気に飲みする。

零夜「フウ…俺はちょっと休憩する…疲れた……」

ヴィータ「疲れない方がおかしいと思うぞ……」

零夜「そりゃそうだ……」





無論、はやての顔も真っ赤だろうけど…

はやて「ッ…零夜君…」

俺ははやてのそばにさらに近づいた。

ギリギリ体が当たらないくらいの近さだ。

二人でそのまま、ぼうつとしていると、はやてが俺の肩に頭を乗せて、寄り添ってきた

俺は、背中側にあるクーラーボックスに体を預けると、急に眠気がしてきて、そのまま意識を手放してしまった…

零夜「…ん…」

どれくらい眠っていたのだろうか…

辺りはすっかり夕焼け空になっており、人々は片付けて、帰る準備をしている。

シグナム「ああ、すまない、起こしてしまったか…」

零夜「いや、大丈夫だ…」

よく見ると、ほとんど片付けを4人でやってくれていたようだ…

零夜「はやて…」

はやての肩を揺すってまだ眠っているはやてを起こす

はやて「ん…んん…」

零夜「はやて…起きろ…」

はやて「ん…あれ…？私…眠ってもうた…？」

零夜「ああ…俺もな…」

ヴィータ「二人とも、早く着替えないと帰るのが遅くなるぞ。」

はやて「ほんまやな…じゃあ、着替えよか…」

さすがに…は…割愛だよな…

はやて「それじゃあ、帰るか！」

零夜「ああ……そういや晩御飯どつするよ」「……」

はやて「……忘れてた……」

「」「」「」「えゝゝゝ！?!?!?!?!」「」「」「」

はやて「……どつしよ……」

零夜「俺が買い物行ってくる……それでなんか簡単に何か作って食べて今日は早く寝よう……疲れたし……」

はやて「「じゃあ、そつしよか……」

続く…

来年も…みんなでこつやって過ごせたらいいな…

第35話 海へGO!!「楽しみだ…」(後書き)

DO「昨日、自転車がぶつ壊れた作者、デスサイズ・0です。」

零夜「最近はやてに依存してき始めたような気がする主人公、零夜だ。」

はやて「零夜君をさらに落とすにはどうするか毎日考えてるヒロイン、八神はやてや。」

秀吉「ゲストを超えてもはや後書きレギュラー化、木下秀吉だ。」

DO「いきなりだが、この後書きに名前をつける。」

零夜「超唐突だなオイ」

DO「うるせえ、タイトルは、”夜天の影ラジオ”略して”夜影ラジオ”だ」

秀吉「略す必要あったのか？」

DO「気分の問題だ気分の。」

はやて「けどこの名前、ついさっき友達にメールで…」

DO「何も言うな—————ッ!」

続くのか!?

第36話 1日1日を大切に（前書き）

大切にね

派手に行くぜ

第36話 1日1日を大切に

夏も終わり、もう秋になったある日

俺は朝、いつもより少し早く起きた。

いや、目が覚めたと言った方がいいかな？

まあそんなことはどうだっていい。

そんな事より、目の前の問題を解決する方が大切だ。

俺は昨日、いつもより少し早く就寝した…

無論、1人でだ。

だが何故

はやてが俺の隣で、しかも抱きつきながら寝てるんだ!?

しかもご丁寧に俺の体の向きを横にむけて向かい合わせの状態で!!

何があっただろうなった!?



はやて「…ばれた？」

零夜「当たり前だ…俺が起きようとした瞬間に抱き締める力が強くなったからな…そんな事より…何で俺の部屋で寝てるんだ？」

はやて「だって…ずっと一緒に居たかったんやもん…／／／／／／／／／／／／／／／」

零夜「ったく…」俺は改めて起きようとする

はやて「ん〜…もうちょっと一緒に寝てようやあ…／／／／／／／／／／／／／／／」

零夜「いや、朝ご飯作らねば…」

はやて「心配あらへん、昨夜作って後は温めるだけやから…それに、みんなには協力してもらってるし…」

全員共犯!?

零夜「何故こうなったし」

はやて「だから…今日は二人でゆっくり寝よ…」

零夜「…何故こうなったし」

零夜「そろそろ起きないとマズくないか？」

はやて「今何時？」

零夜「10時30分」

はやて「ふええ！？寝過ぎた！」

零夜「だつたら早く起きよう…よつと…」

俺ははやてを抱きかかえて車椅子に乗せてやる

零夜「じゃ、朝ご飯食べて、昼御飯の準備をちよつと始めようか。」

はやて「おはよう…！」

シグナム「おはようございます、主ははやて。」

シャマル「おはようございます、はやてちゃん。」

ヴィータ「おはよう！はやて…！」

ザフィーラ「おはようございます。」

零夜「あ、俺には何も無いのね…ははは…」

零夜「はあ…疲れた…」

俺は朝ご飯を食べた後、今日まさかの買い物行くのを忘れていたと言う事態が発生し、全力疾走で買い物に逝って来たのだ…

はやて「零夜君、字が違うで…」

はやて、地の文に突っ込みを入れるのはやめてくれ…それとあれはそれだけ疲れたと言っただけだから…

はやて「ふ〜ん…とにかく、お疲れ様！」

零夜「ああ…」

はやて「じゃあ零夜君は休んでて、今日は私が作るから。」

零夜「ああ…そうさせてもらっよ…」

はやて「よっしゃ、できた！ヴィータ！食器用意してくれる？」

ヴィータ「はい！」

零夜「ふう……」

俺はソファに座ってくつろいでいた

さすがに10分間全力疾走は疲れる

まあ昔の俺なら余裕だったが

影宮万夜

零夜「…もう…10月か…」

残暑も無くなり、そろそろ少しずつ肌寒くなり始める時期だ。

零夜「…平和だな…」

つくづく思う。

刀夜の時は  
かつては戦うしかなかった

戦うことしかできなかった

それしか知らなかったから…

一度死んで、”零夜”とひと生きて、記憶が戻って、何故が刀夜が俺の中に居て、俺と刀夜が別人なのか同一人物なのか解らないけど

刀夜の記憶は受け継いでいる

そのせいなのか

平和に過ごしているとなんだか僅かに違和感を感じるときがある

平和なのは嬉しいが、もっと戦いたい

そんな感情が、俺の中にある

結局…

俺は戦つてしかできない…

けど…

………は、ちやて、俺と一緒に居る間、は、………

そんな事を忘れていたい…

だから…

もっと…

ザフィーラと…

シャムルと…

ヴィータと…

シグナムと…

はぢせしと…

あつとと…あつとと…一緒に…

平和に…暮らしていく…

その平和を守るために…

俺は戦う…!!

はやて「零夜君？」

零夜「ん…あぁ…」

はやて「もう…そろそろきからずっと呼んでるのに…」

零夜「ごめんごめん…ちょっと考え事をね…」

はやて「昼御飯、できたぞ。」

零夜「わかった、今行くよ。」

… っば… 平和が一番だな…

たぶ...

この平和が崩れるなんて…

このときの俺には予想も出来なかった…

続  
く  
…

### 第36話 1日1日を大切に（後書き）

…今回、夜天の影ラジオ…まありやくして夜影ラジオは無し…

次回から、A・S編突入

それでちょっと注意と予告？みたいなのをします。

まず、今まではほぼ全て零夜視点で進んできましたが、次回からは  
そうは行きません

基本は第三者視点か零夜視点で進めます

どうしてもと言う場合、そのキャラの視点に変わります

だから突然変わってややこしくなるかもしれません。

ではA・s編の予告的なやつを…  
Angel Beats!っぽくやってみました…

「あの男…ただ者じゃない…」

「話を…聞いてっばー!!」

「悪いな、これもアイツの為なんだ…」

「てめえ…何者だ…」

「…友達だ…！」

「…ただの戦士さ…」  
ソルジャー

「俺が…お前を止める…！」

「僕も忘れないでよね…！」

「……来い…」

「…その仮面の下はどんな面してんだろうなア…オイ…」

「もう…止まれん…止まれんのだ…！！！」

「邪魔を…するな…！！！」

「悪魔で…いいよ…」

「…何で…何でこうなったんだあああああ…！！！！！！！」

「…見せてみな…お前の本気をよお…！！！」

「消え去れ…！！！」

「お前じゃ俺には勝てねえよ」

「目を覚ませ…！」

「もう…遅すぎたのだ…何もかも…」

「違う！夢は…！他人から与えられる物でもなく、他人にかなえてもらつものじゃない…！自分で掴み取る物だ！」

「名前をあげる…」

「やっば、最後は主役に譲んねえとな！」

「お膳立てはしたよ！」

「うおおおおお…！このッ！一撃でッ…！」

「これでいい…」

「…さて…そろそろ行くか？」

「ああ…！」

「さあ…派手に行くぜ…！」

と…まあこんな感じでしょうか…

まあ…今書いたセリフを必ず使うとは限らないんですが…

ではでは…次回、

A・S 編第1話 突然じゃない始まりなんてつまらないだろ？

…派手に行くぜ!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8266w/>

---

魔法少女リリカルなのは～夜天の光の影～

2011年11月4日02時49分発行